

人文地理学における言説研究 ——概念的な基礎づけと経験的な手法の発展——

ゲオルク・グラスツェ*、アニカ・マティセック**
(木村 惟啓*** 訳)

Georg GLASZE, Annika MATTISSEK (Hg.)

Handbuch Diskurs und Raum : Theorien und Methoden

für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung.

transcript Verlag. (Bielefeld, 2021) より

Kapitel 1. Diskursforschung in der Humangeographie:

Konzeptionelle Grundlagen und empirische Operationalisierungen.

1. 本稿はGeorg GlaszeおよびAnnika Matissek編「Handbuch Diskurs und Raum: Theorien und Methoden für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung (訳:ハンドブック 言説と空間——人文地理学及び社会科学, 文化研究における空間研究のための諸理論と諸手法)」の第1章の日本語訳である。
2. 文中の[]は訳註であり, 必要と思われる箇所では原語やそれに対応する英語表現, あるいは他にあり得る日本語訳等を記載した。
3. 本文中のイタリックの箇所は, 訳文中でもイタリックで表した。
4. 本文中に他の文献が引用されていて, その文献の日本語訳が存在する場合には, 可能な限り既存の訳から引用するよう心がけた。ただし, 訳者の責任で一部改変した箇所もある。

ヨーロッパの境界が様々な社会-政治的, また歴史的なコンテクストの中で全く異なったように引かれていたり, その際に「ヨーロッパのアイデンティティ」もまた全く異なって定められていることを, 我々はどうのように理解したら良いだろうか?なぜ台風は「自然災害」として, または「神の罰」として, あるいは「人間が引き起こした気候変動の結果」として解釈されるのだろうか?どのようにしてアウトドア・スポーツは今日のブームに至り, どのような身体性と「自然」との相互関係がそこでは新しく求められているのだろうか?数年前には誰も口にできなかったような価値判断やイメージが, 今日に特有なものとして広く受け入れられていることは, どのようにしたら説明がつくのだろうか?

ハンドブック「言説と空間」の出発点は, 意味の社会的な生産や, それによる特定の真実, 特定の社会的・空間的な現実, 同時にそれと関連した権力関係を概念化するための機会を, 言説研究に対して与えることにある。それにより, 言説研究は人文地理学や空間と関連した社会科学および文化研究 [Kulturwissenschaften (英: cultural studies) = カルチュラル・スタディーズ, 以下同じ] に対して, 既存の問い立てに対する新しい答えを与えたり, 新しい問いの世界への扉を開いたりすることができる。

言説研究の対象は, 考え方や言葉, 自己了解や行動の, 個人のレベルを超えたパターン [Muster (英: pattern)] であり, 同時に特定の表象や行動論理が作り出されたり, また常に作り変えられたりするプロセスである。また, 多くの経験的な研究において, 言語的な意味付与のプロセスの分析が重要な位置を占める時であっても, 社会科学および文化研究における「言説」は単なる言語的な記号の次元を越えてゆくものである。「言説」の語は従って, 身体的-物質的および社会技術的な諸実践を区別し, 評価する象徴的な諸実践 (言語および記号の使用) の, その都度ごとに特定の結びつきを意味している。フーコーの言葉によれば, 言説は, 諸制度や経済的・社会的プロセス, 行動の諸形態, 規範のシステム, 技術, 分類の諸類型 [Klassifikationstypen (英: types of classification)], 特徴化の仕方を生み出す, 特有の方法によって特徴付けられている (Foucault 1973[1969]: 68[邦訳 70])。

言説研究の中心的な関心は, 知や真実の生産への問いであると同時に, 知と権力の結合への問いである。特定の言説が覇権的となり, 他が周縁化される中で, 特定の真実, つまりは社会的な現実が生み出される。この中には, 言説の権力作用が存在している。権力は従って, 個々の行為者が持つ属性や資源

* フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン=ニュルンベルク

** アルベルト・ルートヴィヒ大学フライブルク

*** 海城中学高等学校 非常勤講師 geopandov@gmail.com

としても、あるいは人々の「上から」作用する抽象的・抑圧的な力としても理解されることはない。むしろ権力とは、集合的な社会関係に内在するものであり、これは抑圧的にも、また生産的にも働く。

言説研究は、真実や社会的な現実を決して絶対的なものや、永続的に固定化されたものとしては扱わない。異なった言説的な文脈の中では異なった言説が支配的になり得るし、従って異なった見方や実践が「真の」あるいは「正しい」ものとなり得る。特に**固有性** [Kontingenz (英: contingency)], つまりは構成された現実の非一決定性 [Nicht-Determiniertheit: 既に決定されているということ、の否定形] と変更可能性が、言説の時間的な変化を取り上げる分析の中で明らかになる。これは、しばしどのような見方や立場がそれ以前に抑圧されたり、あるいは締め出されていたのかが、この変化を通じて初めて明らかになるからである。有効な真実や社会的な現実の変化はその際、根本的な変革になるか、あるいは分析によってのみ映し出される、ほとんど気づかれないようなわずかな変化ともなりうる。ただし、この歴史的な変化への関心によって、ある一時点における言説の構築もまた、めったに一義的たりえないことが忘れられるべきではない。むしろ、異なった立場、つまり究極的には異なった社会的現実の間で、しばし優位や承認をめぐる地位が争われる。従って言説は、常に流れの中にある——意味は常に絶え間なく不一致や破棄、紛争によって引き起こされ、新しく定められる。

従って、言説研究は空間性と権力との関係に対する鋭い視線も持っている。なぜなら、もし空間が単に与えられたものではなく、常に新しく構築されているものとしたら、そして空間がその特質上、社会的現実の生産の根本的に重要な要素だとしたら、特定の空間の構造は、特定の社会的現実の支配的な実現と密接に関わり合っているからである。そのようにして、まず第一に世界が政治・経済的に異なったように考えられ、描写され、そして最終的には生産されたり、また文化的に異なっていくという形で差異が生み出される。このような区別に従って地政学的な紛争も引き起こされたり、あるいは当事者同士の連帯も生み出されたりする。アメリカ軍のイラクへの侵攻がまずもって「no blood for oil」のスローガンに沿うように、経済的な利益追求の結果として表象されるのか、あるいは「文明の衝突」の結果として表象されるのかの違いは、全く異なった連帯や内政・外政の反応を引き起こす。その際には、紛争の要因が異なったように**描写**されるのみではなく、最

終的には異なって設定された当事者同士による、異なった紛争が生産される。

全ての真実や社会的現実を偶有的な、つまり開かれて、変更可能なものとして概念化することは、言説研究の批判的あるいは政治的な要求と結びついている。その目的は、一般にそう思われている所の、固定的な真実や現実を問い直すことであり、それによって異なった真実が考えられたり、生きられたりすることが可能であるということや、異なった現実が可能であるということを示すことにある。それが、「経済的な緊急性」を帯びるものであるか、あるいは当然視されている世界の客観的な区分であるかに関わらず(例えば、グローバルなレベルにおける『東洋』と『西洋』の違いや、ローカルなレベルにおける[行政がスラムに対して指定するような]『問題区画』の設定についての区分が考えられるだろう)。同時に、そのような視角においては、それぞれの研究者の立ち位置も考慮しなければならない。

このハンドブックは大きく2種類の読者を想定している。一つは、(人文)地理学や近隣分野である社会科学および文化研究の学生や研究者で、空間と関連した社会研究における言説研究のポテンシャルに興味を持つ人である。こういった読者に対して、本書が言説研究の中心的かつ理論・概念的なアプローチのいくつかとそれらの認識論上の違いを提示したり、また経験的な研究への導入のための方法も示すことができると思う。このハンドブックは、総合して、言説理論的なアプローチの基礎の上で、どのように構築主義的な空間概念への方向転換が理解され得るかを示すことに重点を置いている。また他方では、この本は学際的な言説研究にかかわる読者も想定している。この読者に対しては、第2部において言説と空間の関係の概念化についての議論を提示し、また第1部と第3部、第4部においては言説理論的なアプローチの受容や人文地理学におけるそれらの手法化についての示唆が与えられる。

この序章においては、さしあたって4つの事例を手がかりに、空間と関連した社会研究における言説研究の可能性を素描してみよう。それに引き続き、本書で提示されたアプローチがおよそ2000年代以降の人文地理学における概念的な発展の文脈の中に位置付けられ、さらにその後には空間のカテゴリーのはっきりと言説理論的な概念化がどのようなものとなり得るのかが議論される。

本章の最後では、政治的な論争を理論的に把握し、また学問の社会批判的な役割を認めるためのどのような機会を、言説研究が開くことができるのかが詳

しく解説される。

1. 空間と関連した社会研究に対する言説研究のポテンシャル

言説理論的なアプローチは、ここ数年の間に、社会科学における多くの領域において注目を集めるに至った（この概観についてはAngermüller et al. 2014を参照）。それにもかかわらず、研究の目的や関心の矛先は、それぞれの領域に個別に存在している。従って、ここでは地理学あるいは空間と関連した社会研究における、内容的かつ概念的な重点を取り出そう。

1980年代以降の人文地理学における激しい論争の中で、客観的に与えられた空間及び空間構造という表象は棄却されるに至った（人文地理学における『空間』議論に関する理論的な取り組みに関しては、本章の後半か、このハンドブックの第2部、それか例えばHard 1986; Crang/Thrift 2000; Miggelbrink 2002; Wardenga 2002; Belina 2013; Escher/Petermann 2016を参照）。この議論は、空間論的転回 *spacial turn* と関連しながら、この数年の間で近隣分野である社会科学、文化研究及び哲学にも波及している（Bachmann-Medick 2006: 284ff; Döring und Thielmann 2008; Günzel 2008, 2007）。空間及び空間的な構造は、もはや客観的に与えられたものとしてではなく、社会的に構築されたものとしてますます概念化されるようになってきている。そして、言説理論的な視角において、社会的な構造が単に与えられたものではなく、また意識を持って行動するアクターとしての個人のアイデンティティもまた、単に与えられたものではないことが前提とされるのなら、空間性の構造と社会の構造との交差を視野に入れる機会が得られることになる¹⁾。

本書において私たちは、この様な言説理論に基礎付けられた、空間と社会との連関に対する新たな視点を用いることで、人文地理学や空間と関連した社

会科学、文化研究における一連の、「伝統的な」問い立てに対する新たな視角が開かれ得ることを示したい。この新しい視角とはどのようなもので、またそれが他のアプローチ方法に対してどのような新たな知見を与えるのかについては、以下の4つの研究領域を例に示される。

線引き [Grenzziehung (英: border-drawing)] のプロセス、領域化と空間に依拠したアイデンティティ

所与の空間及び所与のアイデンティティという認識からの転換によって、空間的な境界が引かれたり、また空間に依拠したアイデンティティが構成される言説的なプロセスが注目されるようになる。特にこのことによって、どのように空間的な差異化（『こちら／あちら』）が社会的な差異化と結合しているのか、それに伴ってどのように「私たち [Eigenen]」と「他者 [Fremden]」との境界が引かれるのかという問いに対する新しい視角が開かれることとなる。そのような空間化は社会において甚大な影響を持っている。なぜなら、まさにこのプロセスによって、（複雑かつ矛盾をはらんだ）社会的な世界 [soziale Welt (英: social world)] が、一般にそう思われているような均質な諸単位へと切り分けられ、それによって様々なスケールにおいて人の行為と関わり合うような、仲間／敵という表象が立ち上げられるからである（Glasze 2013; Meyer/Miggelbrink/Schwarzenberg 2016; Linnemann/Reuber 2015）。

特に政治地理学の領域における研究は、目下の確立された世界の領域化が所与のものとしてではなく、常に生産されたものとして、そして政治的な交渉の対象として見なされるとしたら、学問的な視線それ自体もどのように変化するかを明らかにしている。そのようにして、プレクジットをめぐる論争がわかりやすく示したことは、連合王国のEUへの帰属を巡る問いは、境界線の体系の形成への問いと結びついているのみならず、政治的および経済的な盟約の(再-)組織化という、遥かに広い問いとも結びついているということである（Bachmann/Sidaway

1) 言説理論的な視角からみて、この際に重要ことは、(例えば行動理論的なアプローチや、ギデンズの構造化理論との違いにおいて) 研究の焦点が主体や構造を生産する永続的なプロセスに置かれていることや、すべての構造やアイデンティティが含み得る矛盾や破断、そして最終的にはその挫折に対して高い感受性が持たれていることである。権力はその際、社会的資源に裏付けられた個人の行動に結びつけられ得るのではなく、目下のところ定められた構造や主体の生産によりもたらされた効果として理解される。従って、問いの中心は（行動理論あるいは構造化理論の特徴とは異なり）特定の行為者がどのような目的を、どのような社会的（権力）構造（資源あるいは規範）に頼って達成しようとするのかという点にはない。むしろ、分析の目的は、のちに特定の目的への想像を膨らませることとなる主体そのものが、一体どのように構成されるのかという点にある。同様にして、特定の社会的資源が、特定の（そして変更可能な）言説的な状況に置かれる中でどのように意味を獲得するのかということも問われることができる（下記参照）。

2016)。同様に、「私たち」と「他者」という地政学的な表象の分析が多くの例を用いて示したことは、これらが（最終的に軍事的な侵攻に至ることとなる）二国間の関係に対してどのような影響を持つのかだけではなく、その際にもたらされることとなる線引きが、何々人といったアイデンティティ、つまりは「私たち」「他者」といった知覚そのものに対してどのような帰結をもたらすのかであった（Husseini de Araujo 2011; Bachmann/Müller 2015）。

ここで中心的なことは、そのような線引きや意味づけが価値中立なものではなく、多種多様な権力関係によって特徴付けられているということだ。これは日常生活の中で、数え切れない程の方法を通じて顕わになる——例えば異なった国の住人が入国の際に通過しなければならない、異なった検査の手続きから、国籍、それに基づいたステレオタイプ（『やっぱりドイツ人／トルコ人／アラブ人／アメリカ人は...』）に依拠してもたらされる、互いに対する日常的な差別に至るまで。

社会／環境の関係の構成

言説理論的な視角においては、社会の内側で起こる差異化のプロセスのみではなく、いわゆる社会／環境、あるいは人間／自然の関係の領域における問い立ても、新たに解釈し直される。そこでは、当然視されている「自然」あるいは「環境」といった所与の表象が打ち破られ、どのように人間と自然あるいは社会との間の境界が引かれるのかと言った問いが浮き彫りにされてゆく。洪水、干ばつ、あるいは他の異常気象が「自然」ものとして解釈され、従って人間の影響の外に置かれるのか、あるいは人間による気候変動の結果として解釈されるのかという問いは、どのように「自然」が特定の言説的なコンテキストの中で構成されるのかという問いに目を向ける中でのみ、答えられることができる（Flitner 1998; Zierhofer 1998, 2007）。

そのような視角は、地球的な気候変動をめぐる現在の議論にも貢献することができる。気候変動の原因や、その（地域に特有の）影響に対する問いが前面に立つような、純粋に自然科学的なアプローチとは対照的に、言説理論の視点からは、どのようにして（自然）科学的な認識が、論証に用いられる様々なロジックや制度的な文脈の中に結びつけられるのかを問うことができる。従って、例えばどのような他のテーマや社会的な情勢（例えば経済的な発展やポストコロニアルな抑圧的關係、あるいは国際政治における国家的な組織）が気候変動と結びつきうるの

か、そしてどのような実践や行動及びその方法が、それを通じて可能となったり、公認されたり、あるいは周縁化されたりするのかを問うことが可能になる（Paterson/Stripple 2007; Pettenger 2007）。この文脈において言説分析は、例えば成長志向のおよび近代化志向的な解決策とポスト成長的あるいは脱成長的アプローチの間にはどのような原理的な違いがあるのかを浮き彫りにしてきた。前者が気候変動との戦いにおいてテクノロジーと市場経済のメカニズムに賭けている一方で、成長批判的言説は資本主義的な思考方法の支配の中で、成長という支配的なパラダイムの根本的な問い直しを要求している（Anshelm/Hultmann 2015; Krüger 2015）。

また、環境と関連した（計画策定上の）紛争の分析においても、言説分析は利用されている。計画の決定における「正しさ」や「ふさわしさ」を巡る適切な説明は、例えばエネルギー転換の実現（Roßmeier/Weber/Kühne 2018）や、風車の設置（Leibenach/Otto 2012; Otto/Leibenach 2014）、都市におけるエネルギー政策および気候政策の実際の施行（Mattissek/Sturm 2017）という問題との関わりの中で調査される。その際に重要なのは、まず第一に、どのスケールにおける、どのような保護の要求が特別に重要性が高いものとされるのかという問い（例えばグローバルな気候変動対ローカルな自然保護）であり、また第二には経済的、社会的および環境と関連した諸要求がどのような情勢の下に言説的に立てられるのかという問いである（Günzel 2016）。

経済と空間

経済と空間の関係に対する学問的な取り組みは、長きにわたって一般的な規則性や、例えば立地場所の決定に対する適切な回答の探求を通じて行われてきた。従って、特に経済地理学においては、空間に関わる経済行為の一般的な規則性を示すことを目的とするような、一連のモデルが開発されてきた（Schätzl 1978; Voppel 1999）。言説理論的な動機を持ったアプローチはこの文脈の中で、経済学的な必然性も、また経済学的な法則性も、社会的に生産された言説構造として理解することを通じて、経済学的並びに政策立案上の議論の両方に大きく貢献することができる。

このことによって、経済的な連関も、他の社会的な構造化と全く同じように、社会的に生産され、文化的に特殊であり、従って原則的には変更可能かつその背面を問うことができるような構築物としてテーマ化することができるようになる（Berndt/

Boeckler 2005を参照)。つまり、例えば経済あるいは市場の法則であっても、それらが意思決定のプロセスや「事物や行為の」ヘゲモニー化に基づいているという意味では、それらは政治的である (MaeBe 2016)。そのような視点に立てば、例えばグローバル化の「必然性」や、「ネオリベラルな」経済原理の持つ評価基準も、それらがどういった他の視点や決定を周縁化し、またどのような権力関係がそれらを通じて構成されているのかという点から、問い直されることができる (Mattissek 2008; Schipper 2013; Dzudzek 2016)。その際に印象的なことは、経済的な個々の連関の分析が、象徴的な実践と物質的な実践とが言説の中でいかに互いに分かち難くかみ合っているのかを示しているということだ。なぜなら、どこに、どのように投資を行い、そしてそれをどのように正当化するのか、あるいは、例えば経済的な「パニック」の中であって、言語的及び物質的なレベルにおける行為がどのように互いに影響し合い、また互いを強化し合うのかといった問いは、現在では一般的かつ客観的に有効な法則性からはその答えを導くことができず、むしろ言説的な行為のプロセスの結果として概念化されるからである (経済に関する言説分析の概観はDiaz-Bone/Krell 2015を参照)。

現在の——例えば大学の組織化や都市開発といった——多くの社会的な領域において、経済学的な基準が、(半ば)考えなしに絶対的なものとしておかれているような状況においては、そのような見方はしばしば政治的な主張も含んだものになる。ここで重要なことは、目下のところ覇権的な言説論理においては「不合理」かつ「不分別」に見えるかもしれない一連の行為も、オルタナティブとして全く成立可能なものであるということ、それぞれの状況下で実践された言説的な除外や包含を示すことによって明らかにすることである。

空間における人間の行動の制御——空間的な実践の生産

空間と関連した規則性やパターンがどのようにして理解されるのかという問いは、人文地理学における中心的なテーマである。言説理論はここについて、人々を特定の空間的な実践へと導くような制御や (Foucault 2006a[1979], b[1978]が表すところの) 統治の様々な形態を研究するための手がかりを提供している。従って、フーコーの著作との関連において、一方では規律化と強制との関係が、もう一方では規範や価値表象の内面化や信念に基づいた諸形態が問われることとなる (Foucault 1976[1975], 2006a[1979],

b[1978])。ここでも同様に、目下のところ地理学的な研究において重要となるのは (例えば建築物や境界を形作る柵、閉鎖された扉や感知センサーといった) 物質的—技術的な配列と、これらの与えられた物質的—技術的状况に対して特定の意味を与え、それを以って特定の実践や思考を可能にしたり、また不可能とするような象徴的な実践との間の関係である。空間における人や物の循環や移動を制御するような物質的な枠組みとしての諸条件を生産するものの例として、都市計画がある (Foucault 2006b [1978]; Mattissek/Prossek 2013)。そしてフーコーは、とりわけ感染症対策の例を用いながら、特定の病気の伝染経路のさらなる言説的な問題化が、どのように都市の建築的な形象を根本的に変化させたのかを浮き彫りにした。

人々の統治や陶冶[Führung(英:lead):指導, 管理]のそれぞれの側面の複雑な相互作用は、都市における安全保障政策の今日における変化を例にして明らかにすることができる (Glasze/Pütz/Rolfes 2005; Belina 2006; Germes/Glasze 2010; Füller/Marquardt 2010; Schreiber 2011; Füller/Glasze 2014を参照)。ここに、どのようにして言語的な枠組みや、制度的な様式、日常的な実践や物質的な配列が、特定の安全保障の言説の中で相互に密接に関わり合っているのかを見て取ることができる。言説理論的な視角は、このような背景をもとに、歴史的で、社会文化的なコンテキストに依存した「犯罪的」「安全でない」「脅威的」といったカテゴリーの構成を浮き彫りにすることを可能にする。この際、何か特定の言説を正当と認めることや、そこでの論理のパターンは、例えばとある集団に対する特定の場所への立ち入りの規制 (例えばホームレスの駅への立ち入りを禁じること) といった特定の法律の制定や執行の社会制度的な諸相と密接にかみ合っている。安全保障に係る新しい言説は、建築的・都市計画的な配列によって (例えば監視カメラの設置や、特定の集団にとって受け入れやすい/受け入れ難い建築的な形態などによって) 支持され、固定される (Davis 1990)。

これらの、言説理論的なアプローチを用いることで有利に論じられる、あるいは論じられ得るようないくつかの問い立てへの拡張は、もちろんごく少数の選択肢を表しているに過ぎない。ただしこれは、言説研究が多様なテーマの文脈の中で、既存の問い立てや説明様式を補完したり、より豊かにするような視角を新たに開き得ることを明らかにしている。言説研究は特に、行為の背景や要因を行為者の目的や意図にのみ、あるいは言説に前もって存在する社

会的なマクロ構造に帰することは不可能であり、むしろ特定の文脈の中で何が正当な目的であったり、あるいは意味のある状況の理解とみなされるのかという問いそのものが、既に言説的な枠組みにその答えを依存しているという点に関して、その視野を開くものである。従って、社会的な権力関係は、言説研究の視点から見た際には、明示的な禁止や制度的な制約にのみ現れるのではなく、人々の行為の基礎となり、個人のレベルを超えながらしばしば暗示的に作用する意味の構造であったり、あるいは社会的な規範や日常生活の実践、物質的な配列に対するその意味構造の作用や結びつきの中に現れる。

ここで提示されたいくつかの研究や問い立ては、それぞれ異なった強調を伴いながら、言説理論的な研究の概念的な基礎を形作る一連の理論的な考察を援用していた。続く節では、これらをその基本的な特徴において表すこととする。

2. 言説研究の概念的基礎

ドイツ語圏人文地理学並びにドイツ語圏社会科学、文化研究及び人文科学一般は、(例えばフランス語圏での論争とは異なり) その概念的なレベルにおいて、長きにわたって科学的な、批判的合理主義のパラダイムを抛り所とするアプローチと、様々な世界観における主体性を重要視するような解釈的に理解されるアプローチ(例えば解釈学的、行為理論的なアプローチ)の二分によって特徴付けられてきた。そして、*言語論的転回*と*文化論的転回*との関わりの中で、これらと並んで、様々な方法で言説理論的なアプローチに影響を与えた構造主義的及びポスト構造主義的、そしてプラグマティズム的な理論の構想が受容されていった。この3つのアプローチの基礎を、次で簡単に概観する。

構造主義

構造主義の概念とは、個々の現象をとある関係的な組織(構造)におけるそれらの位置から説明しようとする理論や方法を指す。事物(例えば単語や文書、物質的な人工物など)は、従って、*それ自体*では絶対的、本質的に与えられた意味を持たず、むしろ特定の意味システムの内部においてその位置を占めることによって、はじめて意味を持ちうる。言語の中にはその外側の現実性が写し取られうるのだろうかという想像、つまりは言語が他の事物の単純な代理であるというモデルが棄却されるという点で、意味の



図1: ソシュールの記号概念における、シニフィエ(概念、表されたもの)とシニフィアン(表しているもの)

出典: de Saussure 1931[1916]: 78[邦訳 97]

生産におけるこの相対性は言説理論にとって重要になる。

構造主義の創設者は、言語学者のフェルディナン・ド・ソシュールとみなされている。彼は20世紀の初め頃に、言語は抽象的な規則によって特徴付けられた記号システム(ラング)であり、それは具体的な発話活動(パロール)の中で表現され、また人々の世界に対する想像や知覚を構造化するという考えを発達させた。特に、以下の3つの仮定がソシュールの理論の根本をなすと考えられている。

1. シニフィアン[記号表現]とシニフィエ[記号内容]の組み合わせの恣意性: ソシュールによれば、言語的な記号は示しているもの(シニフィアン)と示されたもの(シニフィエ、つまり概念)を結合するものである。このことはつまり、様々な言語で生じるシニフィアンとシニフィエの結びつきは、単なる慣習にのみ基づいていることを意味している。これらの記号は、なぜ、「B-a-u-m」[木]という文字の羅列が、幹と葉のついた植物を表しており、住居を表していないのかという理由をその「内部」には持っていない(Saussure 1931[1916], 図1を参照)。ソシュールの考えは、異なった諸言語の比較の中で具体的な説明が可能となる。つまり、「犬」という概念(シニフィエ)が異なった言語においてはそれぞれ異なったシニフィアン(例えば英語では*dog*、フランス語では*chien*、ロシア語では*Собака*)と結びつけられているということは、従って、シニフィアンが恣意的であるということを表している。ただ同時に、概念は言語のシステムに先行するものではない。もしそうであったのなら、すべての言語において同じ概念が存在し、それらは単にそれぞれ異なったシニフィアンと

結びついているということとなるだろう。従って、翻訳は常に正しく、簡単に行うことができるようになる。現実には、多くの概念が特定の言語にのみ存在し、他の言語には存在していない（例えば、ドイツ語における『Heimat [故郷]』や『spießig [偏狭な]』といった概念は、英語の中には対応物を持たない）。だからこそ、翻訳は常に難しさを抱えている。（こういった問題群は翻訳論的転回についての研究が議論しており、人文地理学に関してはBruns/Zichner 2009; Crane/Lombard/Tenz 2009; Husseini 2009を参照）。

2. 意味の構造の基礎としての関係性：ソシュールは言語を「音の一連の差異が観念の一連の差異と結合したもの」として理解していた（1931[1916]: 144[邦訳168]）。ソシュールによれば、シニフィエの序列[Ordnung (英: order)]とシニフィアンとの序列は互いに完全に符合し合う。このシステムは「それぞれの記号の内側に」（Ibid.）シニフィアンとシニフィエの結合を作り出す。「B-A-U-M」といったような特定の文字の（発語の）順序と、「木」のイメージとの間の結合は、従って、他のシニフィアンとシニフィエとは別個に存在している。



図2：境界付け [Abgrenzung] を通じた意味の生産
 [Bezeichnetes: 意味されたもの=シニフィエ,
 Bezeichnetendes: 意味しているもの=シニフィアン]
 出典: de Saussure de Saussure 1931[1916]: 137[邦訳 161]

3. 言語の外側に存在する「客観的な世界」の棄却：ソシュールは、「言語の前に」既に与えられている固定的なイメージの存在を棄却する（Ibid.: 97[邦訳120]）。彼の視点によれば、思考とは、言語と分かちがたく結びついており、言語的な表現なしにはただの「無定形の不分明なかたまり」であるのみになる（Ibid.: 133[邦訳157]）。これは、意味の生産のための枠組みもまた、社会的に確立した言語に書き込まれた、構造的な特質を通じて作り出されるということの意味している。

特に最後の論点は、なぜ構造主義が自律的な主体という考えを批判し、またそれを以って主体性

に目を向けるアプローチにもはっきりと反対の立場をとるのかを明確にしている。なぜなら、意味は言語の中で初めて形作られるという考えが示唆するのは、それぞれの主体に対して世界の記号化を可能とするような、それぞれ社会的に確立された（言語的）構造を通じて、あるいはその構造の中において、彼らもまた、そのおそらくは個人的な世界に対するイメージや評価を発達させることができるということだからである。

記号論／一般記号理論

ソシュールの著書「一般言語学講義」の中には既に、記号のシステムとしての言語という彼の着想が、新しい学問、記号学の基礎となるべきだという考えが見て取れる。記号学とは「社会生活のさなかにおける記号の生を研究するような科学」（Ibid.: 19[邦訳29]）であるという。最終的には「象徴的儀式や、作法、軍用記号」までもが言語のような記号体系として分析される。ソシュールはすでに構造主義的な考えを言語以外の意味体系の領域へと拡張し、最終的には社会全体を分析対象とすることを構想していた。1950年代以降には人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースと文芸批評家のロラン・バルトがこれと対応する成果を著している。レヴィ＝ストロースは親類関係や社会的な神話の中にある構造を浮き彫りにし、言語の構造と同様に分析してみせた（Lévi-Strauss 1971[1958], 1993[1948]）。ロラン・バルトは、1957年に記号学の構成のための提案を取りあげ、非言語的な意味体系——流行——の分析へと取り組んだ（Barthes 1985 [1967]）。また、記号学の代わりに、非一言語学的な意味体系の分析に対しては、記号論の概念が立ち上げられた。言説理論の視角からは、言語学における構造モデルの非言語的な意味体系への拡張は、日常生活の実践や人工の物質の有り様も分析と結びつけることができるようになるという意味で重要なものである。

ソシュールと並んで、チャールズ・サンダース・パース（1839-1914）も記号論の創設者とみなされている。パースは、三位一体の記号モデルを前提に置いている。これは、記号内容（シニフィエ、記号客体）、記号形態（記号を担うもの [Zeichenträger (英: signporter)]）及びこの記号の聞き手の意識における再現 [Repräsentation (英: representation)]（解釈）の三つである（Eco 1994[1968]: 76ff）。この三位一体の記号のモデルは、プラグマティズムのアプローチの基礎となる。なぜなら、ある記号の持つ意味は、予め与えられた構造によって固定化されるのではなく、特

定のコミュニケーションのプロセスの中で生ぜられるという前提をもとに、パースは、意味は静的でも絶対的でもなく、コミュニケーションの文脈によって定められると考えたからである (Nöth 2000: 64)。

言語行為論と語用論

コミュニケーションの文脈を言語形式の分析へと導入することは、*語用論的なアプローチ*の中心的な構成要素の一つである。その際の分析の中心は、それぞれの目的を果たすために言語形態を用いている話者の言語行為にある。簡単に言えば、ジョン・オースティンの著作のタイトルにあるように「How to do things with words?」という問いにまとめることができるだろう。従って、語用論は言語形態の研究に中心的な区分をもたらす。つまり、言語表現の構造的な構成要素 (『記号論』) と、それぞれの文脈における実際の言語の使用 (『語用論』) である (Searle 1969; Austin 1972[1962]; Grice 1975)。

プラグマティズムの研究の中心的な関心は、特定の文脈において特定の目的を達成するために、どのような発言や文章、あるいは言語形式が選択されるのかという問いにある。言語行為論と語用論は、従って——*構造的なアプローチ*とは反対に——言語行為がその中に埋め込まれているような、一般的で文脈に依存しない法則や構造を扱うのではなく、文脈に依存した言語の使用と関わり合う (Wittgenstein 1953)。この結果として、例えば文脈の異なる2つの同じ文は全く異なった意味を取りうる。しかしながら、その文がどの意味をとるのかは任意ではなく、一定程度一般的なコミュニケーションのルールに従って定められる²⁾。目下の、空間と関連したコミュニケーションの文脈においては発言の意味内容はしばしば明示的なものと暗示的なものとに区別される。従って、例えば多くの発言は空間的な考えの枠組みを前提としている。つまり、世界は明白かつ均質な空間的単位に切り分けることができるということが、多くの場合自明のうちに前提とされているのである (Schlottmann 2005)。

語用論のアプローチは、構造主義的な着想とは対照的に、言語行為や発言の持つ唯一性や偶然性 [Ereignishaftigkeit: 出来事を含んでいること] に対して目を向けたことや、意味が客観的に定められる

のではなく、テキストやコンテキストとの特定の結びつきの中から生じるものであるという点を明らかにしたことから、言説理論的なアプローチと関連すると言える。同様にフーコーは「*知の考古学*」(1973[1969])の中で、特殊性や一回性によって特徴付けられている発話もまた、言説の最小の単位として定義し、それに基づいて言説的な編成 [Formation (英: formation)] における個々の発話の結びつきを研究した。この言説の編成、つまりは個人を超えた法則やパターンへの焦点化によって、語用論と言説理論の認識論的な違いが導き出される。言語行為論のアプローチが個々の「話者」の持つ役割やその単一的な行為に焦点を当てるのに対し、言説分析は、個人を超えた、社会的現実の生産の諸法則へと目を向ける。

ポスト構造主義における表象モデルの批判

ポスト構造主義的なアプローチも、構造主義的なアプローチと同じく、意味を差異化による効果とするところから始まる。ただし、構造主義とは対照的に、ポスト構造主義的な研究では、*文脈*によってそれぞれ異なった差異化が可能であり、従って常に新しい意味の創出が可能であることが強調される。構造主義が試みた、後に言語 (及び他の記号システム) の中に反映されることとなるような、所与の現実における客観的な法則への探求は、ポスト構造主義の理論では (語用論的なアプローチと同様に) 棄却される。もっとも、この言語形式の持つ「絶対的な」意味の棄却は、(プラグマティズムのように) 個々の行為者が持つ個々の表象という考えによって理由づけられるのではなく、代わりに記号はそもそも固定的な意味を持つことなどなく、*意味のレベル*においても常に新しい、以前と異なった参照関係が構成されるということが論証されていく (Derrida 1972[1967, 1974[1967]. Lacan 1973[1966])。

それぞれのシニフィアンは、異なったシニフィアンとの協調の中で、一つの、かつ一意に定められた意味を持つのだろうという構造主義の想像は、ここで暗礁に乗り上げることとなる。なぜなら、その構造の中心は存在しない、つまり永続的に固定化された意味を持ったシニフィアンは存在せず、永続的な参照の戯れ [Spiel (英: play)] があるのみだからであ

2) 例えばグライスの協調原理によると、コミュニケーション行為における送り手と受け手は、それぞれ他方から理解されることや、そこから意味のある情報を得ることを前提とする (Grice 1975)。前提 [Präsupposition (英: presupposition)] の概念は、発言の中にはしばしば、所与のものとして捉えられている一連の前提が含まれていることを示している (Langedoen/Savin 1971)。例えば、「私は美しい東ドイツに住んでいます」という発言は、明示的には「東ドイツは美しい」という意を表し、暗示的には「東ドイツという分けられた空間が存在している」ことを前提とする (Schlottmann 2005)。

る (Derrida 1974[1967])。この考察は、辞書の働きを例にとると分かりやすい。辞書のそれぞれの項には、他の幾つかの項への参照が記されており、その参照先でもまた他の項が参照されていて、これは終わることなく続いていく。これに加えて、差異化やその関係化のプロセスも超時間的なものではない。構造主義的な研究は、一面では、ある記号は繰り返し用いられることで意味を強めていくことを前提としているが、特にデリダは、繰り返しは常に意味の遷移とも結びついていることを指摘する (Derrida 1974[1967]; Zima 1994; Munker/Roesler 2000)。つまり、シニフィアンは——構造主義が想定するように——一組の固定されたシニフィアンから異なっていくのではなく、常にその他のシニフィアンたちから異なっていく。そのような開かれた参照の枠組みの中では、意味もまた永続的に変化していく。一つの語彙素 (*lexem*) であっても異なった文脈においては常に異なった意味を持ち得ることも、このようにして理解される。例えば「9.11」という語は、今日では90年代とは異なった解釈をされる。また、「Hund」[犬]という語の意味は、ドッグスポーツ同好会に在籍する動物という文脈で語られるか、例えば自動車販売店の文脈で語られるかによってそれぞれ異なってくるし、同時にそのそれぞれにおいても語の意味が一つに定まることはないだろう。従って、言語がある種の表象モデルだとする考えは、ここで断念される。つまり、言語に先立って存在し、言語から独立している内容が、言語的な記号によって伝達されるのだろうという想定が、ここで棄却されるのである。

この、言語の表象モデルの棄却と、言語形式の持つ多義性は、言説理論的な研究の内部におけるすべての概念的な違い(下記参照)を超えて、数多くの言説理論的なアプローチの間で共有されている。それと対応してする形で、ポスト構造主義及び言説理論の双方において基礎となるようないくつかの前提が置かれている。

- 言語は、社会的な意味構造における中心的なメディアとして認識される。表象の外部で生じているところの現実という想像への批判は、これと結びつく。同様に、意味や真実の生産は、言語的な規則や構造原理に基づくとされる。
- このように、言語を現実を構築する基本原理として再認識することにより、主体の理性や合理性、自立性(ひいては行為者による行為の合理的な再構築)を前提としていた啓蒙主義や西洋の近代の自明性への批判が立ち現れてくる (Foucault 1971[1966], 1973[1969]; Lacan 1973[1966]; Žižek 1991; 本章の付説『主体の死』も参照)。
- 言語的な意味構造に関する想像は、原則的には非言語的な関わり、例えば写真や地図、映画、建築や日常生活での実践にも引き継がれる。従って、例えばジェンダーの領域の研究は、身体性の知覚や構成もまた、自然に与えられたものではなく、社会的な言説の中で刻まれてゆくことを明らかにしている (Butler 1997[1993], 2004)³⁾。
- この構造原理は(構造主義とは異なって)開かれたものとして、かつ原理的に閉ざされ得ないものとして理解される。このことは、言語表現は通例、多くの異なった言説的な連関を接続させるということ、それらの意味は「上書きされている」、つまり意味は一意に定められ得ることはなく、異なった解釈を可能とし、また歴史的に変わって行き得るということを意味している。そして、構造概念はその際に歴史化され、脱中心化される。つまり、構造の歴史的な変化の可能性が強調されると同時に、個々の認識が、そこでの観察者の立ち位置に依存していることもまた、強調される。このことは、例えばポスト構造主義とフェミニズムのアプローチの中で明らかになる (Bhabha 1994; Hall 1994, 1999[1989]; Spivak 1996)。これらの中では、「客観的に真」であると思われている、歴史の記述や社会的現実の類型化の形態が、実際のところ特定の視角、つまりはヨーロッパ中心主義的な、あるいは男性中心主義的な世界観しか提供していないことが指摘されている。しかしながら、これと並んで、覇権的な権力構造によって抑圧され、締め出されてしまった一連の現実の構想も存在しているのである。
- 以上の考察から、普遍主義、客観性への信仰、および本質主義に対する批判が導き出される。社会的な現実の構造を形作るような、統一的な

3) 意味の構成は非一言語的そして身体的-物質的なプロセスや結合にどの程度関連しているのかという問いについて、言説理論はいくつかの異なった立場を取り入れている。つまり、例えば言語学の大部分で支配的な言説の狭義の理解においては、言説は純粋に言語的なものとして理解されており、より広い言説の理解においては、言語的そして同様に非一言語的な諸要素の特有の結合を通じた社会的現実の生産が研究されている。

原理という考え(例えば『理性的な主体』『空間的あるいは経済的な構造』または『歴史・目的論的な発達』)は、特定の区分やあるものの包含、排除、周縁化や本質化とともに現れてくる権力的かつ社会的な構築物として理解される。

- こういった概念的な方向づけは多くの場合、政治的なプロジェクトである「言説の開き」[Öffnung des Diskurses(英: openness of discourse)]へと通じてゆく(Laclau/Mouffe 1985; Foucault/Martin 1988[1982]; Mouffe 1999[1996], 2007[2005]を参照)。そこでは、自然なこと、かつ覆すことができないものとして考えられている多くの類型や概念が、実際にはそのように作られ、権威づけられたものであり、従って常に偶有的かつ変化し得るものであることが明らかにされる。このようにして、社会的現実の生産の構造原理を公にすることは、多くの場合、議論をより多岐に渡るよう広げて行ったり、周縁化されている立ち位置を中心へと押し戻したり、あるいは「自然なものとして」客観化されているように見えるものを問い直したり、その内実の議論を始めることを目的としている。

付説:「主体の死」/ポスト構造主義の視角における主体

言説理論的なアプローチの中心的な特徴となり、そして同時に行為者中心的な視角からこれを区別する際によく引き合いに出される基準となるのは、自律的かつ意志を持った行為主体という考えへの批判である。この批判は、しばし引用される、フーコーの「言葉と物」(Foucault 1971[1966]: 462[邦訳409])の最後の文に最もよく顕れており、彼はそこで以下のように述べる:「人間は波打ちぎわの砂の表情のように消滅するだろう」。しかし、このいわゆる「主体の死」によって、主体性というテーマが議論から「切り落とされてしまう」訳では決してない。むしろ、ポスト構造主義的な視角からは、主体や主体性、アイデンティティの言説を通じた構成と関わるような、一連の概念的な問い立てが生じてくるのである。というのも、行為者および話者の主体を、言説以前にあらかじめ与えられてはいないものとして概念化することは、言説理論の見地からすれば、主体や行為者が重要でないことを意味しないし、ましてや研究対象として興味を持たれないことを意味するものでもない。むしろ、主体性やアイデンティティが言説的な効果としてその内に生じるような構造原理や権力構造、アイデンティティの構成のプロセスが、

興味を中心へと持ち込まれるのである。

アイデンティティが言説の中でどのようにして構成されるのかという問いに対する回答については、その概念的な位置付けや焦点に関して様々に異なった一連のアプローチが存在している。それらに共通しているのは、個人のアイデンティティを一つの「真の」核心に帰することはできないという前提である。むしろアイデンティティは、言説の中で初めて構成されるということが議論の出発点とされている。例えば、ヨーロッパに関する言説は「ヨーロッパ人」という主体のポジションを生じさせるし、人種的な言説は「白人」「黒人」のようなポジションを構成する。この際に、これらのアイデンティティが安定した、その中に閉じている社会的な役割と混同されてはならない。ポスト構造主義的なアプローチにおいては、個人のアイデンティティは結局のところ常にハイブリッドで、矛盾をはらんでいたり、壊れやすい物であり続ける。

これらの共通した前提を置いた上で、いくつかの異なる言説理論が、現象としての主体を異なる方法で概念化している。この方法はここで概観的にまとめられるほか、部分的には本書の個別の章で取り上げられる。

- 一連の言説理論的アプローチに対して影響力を持ちながら (Foucault 1971[1966]; Laclau/Mouffe 1985; Butler 1990), それ自身は言説理論の枠組みの中には直接数えられないものとして、マルクス主義の伝統の中で議論されているルイ・アルチュセールの研究がある。彼は審問 [Interpellation] や重層的決定の概念を確立した。審問とは、イデオロギー的な国家機構を通じて主体が呼びかけられる際の動きのことを指す。従ってアルチュセールは、経済的唯物論に基づいて、自律的な主体という考えからのオルタナティブを描いた。彼によれば、個々人はイデオロギーによって「呼びかけられる」、つまり、特定の主体のポジションに配置されるのである。メディアや教育、あるいは家族といった社会制度は、何が労働者で、工場主で、生徒で、警官たるのかを定義し、それを「教化」することによって、個々人は自律的であるだろうという印象を呼びさます。(Althusser 1977[1970]: 140[邦訳下巻84])。この呼びかけは、経済活動を通じて定められているであろう真の社会的な諸関係を覆い隠すという意味で、イデオロギー的なものである。この呼びかけの概念と並んで、アルチュ

- セルは、心理学者ジークムント・フロイトの概念である「重層的決定」も取り上げる。アルチュセールは**重層的決定**を、社会的な効果、とりわけ主体のアイデンティティを単一の源泉に帰することができず、またその意味を一つに定めることもできず、それが常に複数の(場合によっては矛盾を孕んだ)参照システムを通じて特徴付けられている状況として定義した(Althusser 1977[1970])⁴⁾。
- 互いに交差し合いながら矛盾し合い、疑問を投げかけ合うような幾つかの異なった参照システムの結びつきによりアイデンティティが形成されるという考えは、多くのポスト構造主義者が強調するところである(Bhaba 1994; Hall 1994, 1999[1989]; Spivak 1996を参照、ポスト構造主義の諸アプローチの概観はCastro Varela/Dhawn 2005が提供している)。彼らは、主体やアイデンティティは決して安定的かつ一意に定められることなく、幾つかの異なった言説的な参照システムにおける位置付けを通じて断片化やハイブリッド化といった現象が起きていることを前提としている。これらの研究は同時に、境界付けのプロセス、つまり「他者」として定義されたある一つの外部からの区別がアイデンティティの形成の根幹をなすことも明確にしている。その際、この線引きは、その一方(『自ら』である者)を他方(自らが区別された後の『他』なる者)よりも良く見させるような不均衡な権力関係によって特徴付けられている(これに関しては、例えばサイドSaid [1978]の『オリент』の構築についての研究が詳しい)。
 - バトラーによる、文化的パフォーマンスとしての(性的)アイデンティティの概念(Butler 1990, 2004, Strüver/Wucherpfeffnig 2021による第11章も参照)は、ジェンダー・アイデンティティは誕生に従って自然に与えられるものではなく、権力関係を通じて特徴付けられた社会的な構築物であることを明らかにしている。バトラーは、言説的に構成された主体のポジションは、社会的な実践から独立して生じることはないと強調している。つまり、何が女性あるいは男性を(もしくは他の連続的なアイデンティティを)作り出すのかに関するイメージは、常に行為者及び

言語行為の中で再三確かめられ、テーマとして持ち出されなければならない、またそのような社会的な行為の中で同時に変わってゆくことができる。

- フーコーの統治性の概念との関連から始められた**統治性研究**[*governmentality studies*]は、主体が言説の中で占める特定の構造的なポジションに対してはあまり関心を払わず、むしろ個人々人を特定の行為へと導いていく言説的なメカニズムに多くの関心を寄せている(Foucault 1988, 2006a[1979], b[1978]; Rose 1992, 1999; Lemke 1997; Krasmann 2003; Bröckling 2007)。この関連において「自己の技術」は鍵となる概念である。つまり、個人々が、彼ら自身を特定の仕方(例えば職業的な/私的な、成功している/名声のある者として)経験するために用いている手続きや思考のパターン、理由付けのパターンがそれである。このアプローチでは、個人々が言説の中でどのポジションを占めるのかという問いよりも、むしろどのようにして日常の行為・実践が理解されるのか、どの考え方のパターンや技術がその基礎となっているのかが焦点となる(Füller/Marquardt 2021による第3章を参照)。
- エルネスト・ラクラウとジャンタル・ムフ(Laclau/Mouffe 1985)の、あるいは特にラクラウ(Laclau 1996, 2005)の研究における重点は、集合的なアイデンティティ形成のプロセスはどのようにして理解されるのかという問いに対して答えることにあった。この理論を基礎付けているのは、共同体とは何か共有された、核となる本質に基づいて成り立っているのではなく、むしろ言説的な境界付けのプロセスの中で共同体として構成されているという前提である。この境界付けは、いわゆる敵対的な境界の形成を通じて、言説の内部に生じる。集合的なアイデンティティを構成するものは、彼らが何か共通して持っているものではなく、何かそこから彼らが共通して距離を置いているものである(Glasze/Mattisek 2021による第5章を参照)。

言説理論的なアプローチが、本質的に与えられた主体や行為者を前提としていないにもかかわらず、

4) もっとも、特にラクラウとムフは最終審級において経済的なものが社会の他の領域を決定するのだらうという、アルチュセールのマルクス主義への固執と、彼の上書きの概念は両立し得ないとして、アルチュセールの考えを退けている(Althusser 1977[1970]: 130ff.[翻訳下巻130-]; Laclau/Mouffe 1985: 98[翻訳226])。

あるいはだからこそ、アイデンティティと主体性の構成プロセスは、このアプローチにおける関心の中心にある。アイデンティティと主体性はそれぞれの言説構造、あるいは境界付けのプロセスを通じて特徴付けられた、言説的な効果として理解される。従って、言説理論の視角から見ると、どのようにしてアイデンティティや主体性が言説の中に生じるのか、またどのような書き換えのプロセスや権力関係によってこれらが特徴付けられるのかといった問いが中心的なものとなる。

3. 社会科学言説研究のアプローチ

これまでの導入や経験的な例が明らかにしたように、言説研究では、一般に言語的な、また近年ではこれに加えて非言語的な記号システム、意味、権力関係の間の連関をテーマとした研究が行われている。分析の中心には、どのようにして目下存在している参照システムやカテゴリー、客体や社会的な世界に対する評価が生産されているのか、それらはどのような法則を満たしているのか、どのようにしてこの法則は繰り返される行為や実践を通じて具体化されたり、改変されるのかという問いが置かれている。これに加えて、言説分析は、どのようにして言説的な意味や真実の構造が社会制度的な配列によって制限されたり、また日常生活の実践の中で示されるのかも明らかにすることができる。

これら上位の問い立てを背景として、社会科学言説研究の中ではいくつかの異なった研究視角が用いられる（包括的な概観はAngermüller 2014a; Feustel et al. 2014; Wrana et al 2014を参照）。これらはそれぞれ、社会的な現実の言説的な構成に対して異なった視点を重視していたり、異なった社会理論的な仮定に基づいて論証を行っている。ここでは、簡単に3つの重点に分けることとする。一つ目は構造主義的なアプローチ、次に知識社会学を志向した言説研究、最後はポスト構造主義的な視角である（Keller 2004, Lees 2004, Mattissek und Reuber 2004; Angermüller 2005）。これら3つのアプローチは全て、異なった方法で人文地理学へと接続されることができる。続いて、これらが含んでいる前提や分析における条件を提示しよう。

構造主義的な言説研究

構造主義を志向した言説研究の例としては、さしあたり批判的言説分析 [critical discourse analysis]

の研究が挙げられる（Fairclough 2013; Wodak/Meyer 2015; van Dijk 2015; Belina/Dzudzek 2021による第4章も参照）。これは、合理主義的な視角において、テキストがその背景にあるイデオロギーを通じてどのように特徴付けられているのか、それによって社会における支配的な集団の持つ影響力としての覇権を映し出し、また再生産しているのかを浮き彫りにしようとするものである。これらの研究は、マルクス主義的なイデオロギー批判の文脈の中に位置付けられるもので、従ってこれらのアプローチでは最終的に、言説に先立って存在し、言説の中に沈殿して、分析によって問い直され、その「脱自然化」が目指されるような社会構造の存在が想定されている。「脱自然化の概念は、どのようにして社会構造が言説の属性を決定しているのか、また同様にどのようにして言説が社会構造を決定しているのかの提示を、その内に含んでいる。」（Fairclough 1995:27）従って、批判的言説分析は、イデオロギーや言説の次元と、(現実の)社会構造や実践の次元とを区別している。このことから批判的言説分析に対しては部分的に、結果を結局のところ分析に先立って固定してしまっているとの批判が向けられる。つまり、言説が社会—経済的な構造を通じて決定されるものとして概念化されているのだ（例えばPhillips/Jørgensen 2002: 6ff）。最終的にはこれらのアプローチでは、経済が——残りの人文現象とは対照的に——イデオロギーの「裏側」を覗き込んだり、そこに「本当の」構造や実践を垣間見ることができるものとして想定されているのだろう（この点についての批判は、例えばLaclau 1996: 202）。

また、これと並んで、社会構造を前提とはしないながらも、フーコー的な、全体的にはある種の構造主義を志向した社会分析に用いられる言説概念を使用しているものもある。このような視角においては、まず第一に、どのようにして実践や [ものの] 見方、意思決定がより上位の言説構造によって定められるのかを浮き彫りにすることに重点が置かれる。従って研究の目的は、個別の、続いて結合してゆく言説的な出来事や発話の中に共通性や一貫性 [Kohärenzen (英: coherences): 結束構造] を確立することであり、これらを一つの全体像へとつなぎ合わせることである（Diaz-Bone 2002; Bublitz 2003）。

知識社会学的な言説研究

知識社会学的な解釈にのつった言説研究では、ピーター・バーガーやトーマス・ルックマンと関連して、フーコー的な言説概念の知識社会学への

導入が試みられている。その目的は、間主観的に共有されている知識を、社会全体に関わる議論の中で再構築することにある (Hajer 1995; Schneider 1999; Schwab-Trapp 2001; Viehöver 2003; Keller 2005, 2011)。ドイツ語圏の文脈において、ライナー・ケラーによって特に代表されるような知識社会学的な言説研究は、言説を、行為者の象徴的な実践を導いたり、また同様にこの実践から影響を受けたり、戦略的に利用されたりし得る構造として解釈している。これらの実践の中で、言説は形を変え、再生産される。このように、知識社会学的な言説研究はアンソニー・ギデンズの構造化理論や、社会の構造化に関するピエール・ブルデューの考察に基づいている。全体としてこのアプローチでは、言説理論を、社会科学における解釈的なパラダイムの内部にある既存のポジションへと接続することが試みられている。もっとも、ヨハネス・アンガーマミュラーは知識社会学的な言説研究を、一方ではポスト構造主義的なアプローチに基づきながら、他方では言説に先んじて存在する意図を持った主体という考えに固執することで、理論と実践との間に非一貫性を生じさせているとして、また研究実践において解釈を行う研究者の内面が問われていないとして、批判している (Angermüller 2005)。

ポスト構造主義的な言説分析

ポスト構造主義、あるいは記号理論・差異化理論 [Differenztheorie (英: difference theory)] を志向したアプローチは、その理論的位置付けと同様に、言説構造の源泉としての行為主体や社会関係を前提としない。むしろ、このアプローチはその両方を、言説的に構成されたものとして捉え、従って例えばマルクス主義的な理論が経済的な次元にそれを置いたような、言説の外側に存在する社会的な基盤も想定していない。同じように、個々人や集団のアイデンティティも言説的なプロセスの源泉としてではなく結果としてみなされると同時に、その構成は決して完全でも、画一的でも、その内に閉じるようなものでもあり得ず、常に破断や断片化、新しい画定の試みによって特徴付けられるものとされる (Laclau/Mouffe 1985; Angermüller 2014b; Howarth/Glynos/Griggs 2016; ドイツ語圏における受容については Marchart 2002, 2017; Sarasin 2003; Angermüller 2007 を参照)。このため、分析においては、誰が、あるいは何が言説的な構造を組み立てるのかという問いから反転して、どのようにして社会的、経済的そして政治的な構造や、アイデンティティ、意志、行為の合理性といっ

たものが言説的に生産されるのかの理解に焦点が置かれる。

全体としてポスト構造主義的なアプローチでは、最初に示された二つのアプローチと比較して明らかに、その内に完結している、画一的な語りを創出することが目指されていない。そのかわりに、社会的な現実を特徴付けているような破断や矛盾、そして亀裂に沿って広がっているコンフリクトが注目されている。

経験的な研究への帰結

ここで簡単に述べた、研究の視角に関して差し当たり設けられた [heuristisch (英: heuristic)] 区分は、確かに問いの概念的な形成に際しては意味のあるものだが、それらの実践的な使用に際しては常に厳密に区別されるものではない。ディーアス・ボーン (Diaz-Bone 2006) は、特に構造主義的なアプローチとポスト構造主義的なアプローチは経験的な分析においてはほとんど区別することができないことを指摘している。というのも、[意味の]破断を見つけ出すためには、その内に破断が見出されるような構造をまず記述しなければならないからである。同様に、多くの著者は彼らの研究において、自らを上記の双方のアプローチに関連付けているし、構造主義的なアプローチ、ポスト構造主義的なアプローチの双方を考慮に入れている。

構造主義的・ポスト構造主義的な言説理論の経験的な研究における手法の開発は、理解的・質的な社会研究のプロセスにも、また「客観的な現実」の再構築を目指すような科学的なアプローチにも、直接は基づくことができないという困難に直面することになる。むしろ、言説の持つ構造的な側面と同時に、その破断性や、変化の可能性、矛盾を含んでいることもまた、手法的な次元において考慮に入れることを可能にするようなプロセスやアプローチが開発されなければならない (手法の開発についての提案は、例えば Matissek 2007, 2008; Nonhoff 2006; Angermüller 2007; Glasze 2007, 2013; Husseini de Araújo 2011; Dzudzek 2016; Sturm 2019 及び本書の第3部における各章が提供している)。

本書の重点は、様々な理論的・手法的なアプローチ方法を示すことにあり、それらはポスト構造主義的な、また記号理論、差異化理論的なアプローチの反本質主義的な理論的基礎の実現を目指している。

4. ドイツ語圏人文地理学における言説理論的アプローチの受容

ドイツ語圏人文地理学における言説研究の概念的なルーツと発展

言説分析的なアプローチのより広域に渡る受容やその取り扱いの始まりは、英米圏人文地理学については1980年代の終わりから1990年代の始まりごろに、その時期を定めることができる。そこでの言説研究の受容は、主にカルチュラル・スタディーズ [cultural studies, 原文でも英語]、ポストコロニアル研究およびフェミニスト研究から方向づけられていた。そして、これらの研究の文脈を通じて、いわゆる言語論的転回と文化論的転回が人文地理学に対して開かれていった。

言語哲学的な研究やポストコロニアリズムの記述に基づき、これらの研究が明らかにしたことは、言語はもはや現実の単なる解釈やコミュニケーションのためのメディアとして考えられることはできず、むしろ言語や他の記号システムの中において、はじめて社会的現実が形作られるということである。従って(空間と結びついた)アイデンティティも、もはや所与のものとして概念化されることはなく、その代わりに社会的に生産されたカテゴリーとして、まず何がジェンダー—アイデンティティのために、そしてコロニアルなアイデンティティ構築のために経験的に作り上げられたのかが問われることとなる(例えば、Institute of British geographers women and geography study group 1997; Gregory 1994を参照)。これに関する理論的な説明はこれに続いて、特に学問的な研究の立ち位置への顧慮に関して、また他の研究領域との関連の中で行われた(例えばGregory 1994)⁵⁾。

1990年代の中頃以降、ドイツ語圏の人文地理学においても同様のアプローチの受容及び引き継ぎが起こった。ここでも同様に、言説分析に触発されたアプローチは、まずはフェミニスト地理学を通じて、続いて政治地理学を通じて取り上げられた。その際の発展の核は、当時存在したフェミニスト地理学のワークグループであり、彼(女)らは「セックス」と「ジェンダー」との相互関係を、また特に、性的役割や性的行動の形成に際して場所や空間、物質性や身

体性の持つ役割を、言説理論を取り入れたアプローチを援用して調査した(Bauriedl/Fleischmann/Strüver/Wucherpennig 2000; Kutschinske/Meier 2000; Strüver 2003, 2005a, 2007; Wucherpennig/Strüver/Bauriedl 2003; Fleischmann/Meyer-Hanschen 2005; Bauriedl/Schurr 2014)。

1990年代の中頃からドイツ語圏において発達を始めた、政治地理学における新しいアプローチの中では、言説分析的なアプローチの理論的な導入は、英米圏の「批判地政学」の学派の受容を通じて第一に生じた(Ó Tuathail 1996; Oßenbrügge/Sandner 1994; Wolkersdorfer 2001; Lossau 2002; Reuber/Wolkersdorfer 2003)。言説分析のかつポスト構造主義的なアプローチがドイツ語圏政治地理学の主流にまで発展して以降、その多様な研究は様々なスケールにおいてその基礎を提供している(これへの回顧はReuber 2012を参照)。

これに加えて2004年以降には、地理学における文化および社会理論を志向し、それでいて特にポスト構造主義的な研究のためのフォーラムとしての「新しい文化地理学」と名付けられた一連の会議が展開していった。この一連の会議は、地理学の研究景観の広がりの中に、言説分析の立ち位置や理論的な基礎付け、および言説分析の手法化に関する議論を持ち込むことに大いに貢献した。その際に、とりわけ議論の中心的な結節点としての機能を果たしたのは、2006年から2009年にかけてDFG [ドイツ研究振興協会: ドイツの大学や研究機関で行われる基礎研究に対して研究助成をする政府機関] による助成の下行われた学術ネットワークである「人文地理学における言説研究」であった(前文参照)。これには言説研究に関心を持つ数多くの人文地理学者が参加し、言説理論とその適切な手法化への道のりに向けた取り組みが行われた。このハンドブックは、本質的にはこのネットワークの「子」であるところの、更新され、補完された第3版である。

地理学における言説理論の受容と発展は、とりわけ3つのレベルで生じた。つまり、文化—社会理論的なレベルと、手法的なレベル、そして内容的なレベルである。

- 概念的な領域では、様々な言説概念と、個別の問い立ての文脈におけるそれらに対する批判的

5) 矛盾するようだが、ドイツ語—英語圏の領域でポスト構造主義者として見なされている、特にフーコーのようなフランスの思想家は、フランス語圏の地理学では、ごく初期の個人的な繋がり(例えば雑誌Hérodoteによる1976年のフーコーへのインタビュー: Hérodote 1976)を除いて、長い間受け入れられてこなかった(理由についてはFall 2005を参照)。

な評価との間に隔たりが生じている。その際の重点は、個々の言説理論がどのような認識論的な基点を置いているのか、それらはどのように区別されるのか、それぞれの理論はどのような方法論へと結びついていくのかという問いである。ドイツ語圏人文地理学の内部にあっては、フーコーの成果に比較的沿った研究やポスト構造主義的な言説理論 (Lacan 1973 [1966]; Laclau/Mouffe 1985) の受容が大きな役割を果たしている (Dzudzek 2016; Mattissek 2008; Schreiber 2005; Strüver 2005a, b; Glasze 2013; Füller/Marquardt 2009を参照)。人文地理学者はその際に、社会の言説的な構成における「空間の」政治的な意味と役割への注意を喚起することによって、学際的な議論へと貢献している (Glasze/Mattissek 2014; Glasze/Wullweber 2014; Mattissek 2017)。

- 手法的なレベルにおいては、言説理論家たちによる、方法論的にはしばしばはっきりとしない諸概念の手法化に向けた、手続きの立ち上げが行われた。この際には、ポスト構造主義への関心が、客観的な空間を前提としたり、手続きの中で再現可能なものとして主体を「理解」することを目的としたりする (例えば質的な社会研究のような) 経験的な社会研究の手法を簡単に引き継ぐことを不可能にしていた。このことを背景に、ドイツ語圏人文地理学における言説研究では、言説理論的なアプローチの持つ概念的な前提を十分に翻訳することを目指した、一連の経験的な戦略や手法的な手続きが受容され、(そこからさらに)開発され、また試されていった。その中には、一方では言説分析的な問いを形作り、またそれに答えるための方法論的な戦略の発展もあり、また他方では言語行為や発話、語りのパターンについての、量的に行われるコーパス分析の手続きから、コーディングの手続きやエスノグラフィ的な手続きまで至るような一連の具体的な諸手法の(さらなる)発展もあった。

特に2010年代以降は、*more-than-representational geographies* (例えばStrüver 2011) や物質論的転回 *material turn* (例えばWhatmore 2006による初期の英語圏における影響を参照) をめぐる議論の文脈の中で、社会的現実の言説的な構成における非一言語的な形態も、言説研究の視野の中へとますます入ってきている (特に地理学の内部、しかし同時に学際的な言説研究にも含まれる研究としてvan Eeden 2017を参照)。その際に一方では画像や映画、地図といっ

た非一言語的な記号のシステムが経験的に調査されている。それに加えて、物質的-記号論のおよび社会技術的な配列といった記号に基づかない諸実践の役割もまた、ますます問われている。その際に地理学における言説研究が概念的に検討するものは、ブルーノ・ラトゥール (Latour 1996: 375) によっていわゆるアクター・ネットワーク理論の中に素描されたような「物の記号論」[Semiotik der Dinge (英: semiotic of the things)] のアプローチ (例えばBittner/Glasze/Turk 2013を参照) と、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリによるアッサンブラージュ理論 (Gilles Deleuze und Félix Guattari 1992; 地理学における受容については、例えばMattissek/Wiertz 2014を参照) のアプローチ、同様にセオドア・シャツキーによる実践理論的な考察 [praxistheoretische Überlegungen (英: practice-theoretical thoughts)] (Theodore Schatzki 2008, 例えばBaumann/Tijé-Dra/Winkler 2015や, Schäfer/Everts 2019によるハンドブック『実践と空間 [Praktiken und Raum]』におけるいくつかの章を参照) との交流である。このハンドブックの拡張された新版では、2010年代以降の言説理論の概念のおよび手法的な発展を、更新された、あるいは新しく付け加えられた各章で取り上げる。

5. 言説理論と空間概念

社会と空間の関係や、社会的な実践や構造が持つ空間的な側面が理論的にどのように理解されるのかについての議論は、人文地理学において中心的な役割を担っている。その際には、言説理論と空間概念との連関に基づき、言説理論的な視角からどのような空間理解が導かれるのか、という問いが立てられる。従って、どのようにして空間論的転回に対する理解が言説理論的なアプローチに基づいてより広げられ得るのかという、最初に形作られた問いも、答えられることとなる。人文地理学の伝統の中で重要な役割を果たしている(いた)、空間に対するいくつかの概念化の間にある差異を可視化するためにも、また(教授に際して省略されていたとしても)地理学の文脈におけるその固有の位置関係を明らかにするためにも、以下では地理学におけるいくつかの主要な空間概念と、それらと言説理論的な空間概念の差異を概観していく。

言説理論的な視角から見た際には、空間や空間性に関するそれぞれの解釈はパラダイムとして理解され、従って他の理論からの特定の差異化のプロセス

を通じて構築される特定の言説として、そしてそれぞれ特徴的な学問的プロセスのパターンを持ち上げたり、あるいは周縁化するような言説として理解される。従って、研究においてどの空間概念が援用されるのかという問いは、常に特定の歴史的、学術的及び言語的な文脈における霸権的な権力関係を反映している。

客観的に与えられたものとしての空間

19世紀に科学としての地理学が始まって以来、地表の構成物の特定の諸空間への区分は、研究対象や専門的な視角を構成する中心的な探求の一つであった。科学的な議論を強く特徴付けている進化論的—自然科学的そして現実主義的な言説を背景に、伝統的な地理学は1960年代までの間、所与の、本質的な総体として考えられていた空間の記述や理解を目的としていた。このパラダイムは、1950年代における英語圏地理学の、そして1960年代の終わり以降のドイツ語圏地理学での空間科学的なアプローチの利用による計量革命の文脈の中で広まっていった。空間科学的な地理学は、社会的なプロセスや構造の空間的な編成の持つ法則性を浮き彫りにすることを試みる。これによって空間は—少なくとも概念的には—科学的な構造物として概念化される。

1970年代以降、いわゆる人文主義的な転換を背景に、認知地理学の研究はこれに加えて、異なった個人や集団は空間の状態に対して異なった考えを持っていることを指摘してきた。もっとも、ここでの認知地理学も客観的な空間の所与性という考えは持ち続けており、これは単に異なった方法で認知されるものだと言われた。そして、空間科学を志向した地理学はしばし、空間を、それ自身を計量的な社会研究に基づいて構成するものとして具象化する傾向を持っていた。これによって、与えられたものとしての空間という考えは幾重にも再生産されることとなる (Arnreiter und Weichhart 1998; Wardenga 2002, 2006)。

社会的構築物としての空間

1960年代の抗議運動の文脈の中で、英語圏地理学では1960年代の終わりにマルクス主義的な理論の構想が取り込まれるようになった。マルクス主義に啓蒙されたラディカル地理学による、当時支配的だった空間科学的なパラダイムに対する中心的な批判は、このパラダイムの中では客観的に与えられているとされる空間構造が、社会の説明のために援用される際に、そこに仮定された中立性のうちに、その

奥に横たわっている社会的な構造やプロセス (社会的な権力関係や不平等関係)が覆い隠されてしまい、それによって現存する社会関係への批判が阻止されてしまうという点にあった (Anderson 1973)。マルクス主義的な地理学はこの視角を反転させ、社会的な構造やプロセスの内部において、空間性はどのような役割を担っているのかを分析している。つまり、どのようにして社会の権力構造がその空間的な編成の中に特徴として現れてくるのか、そして社会関係は空間構造の中でどのように(再)生産されるのかが問われることとなる。この議論の影響に富んだ基点としては、フランスの都市社会学者であるアンリ・ルフェーヴルによる一連の著作が挙げられるだろう (その際、英語圏地理学にとっては特に1986 [1974]がある)。これらは「空間を、その内に社会的なプロセスと構造が具体化する、社会的な生産物として理解すること」を目指している。そこから与えられるのは、「空間の生産は、それを巡って激しく争われているということ」である (Belina und Michel 2007: 19)。マルクス主義に啓蒙されたラディカル地理学を通じて、英語圏人文地理学においては1970年代以降、地理学によって「空間的な」ものとして記述・分析されてきた構造やプロセスが、つねに社会的な構造やプロセスによる表現や結果であるということ的前提とする視角が、はじめて広範囲に渡って設定されることが可能になった (Massey 1992)。

英語圏地理学における空間の社会的な生産に対する取り組みが、長きに亘って決然とした社会批判的な姿勢によって特徴付けられているのに対し、ドイツ語圏人文地理学における客観主義的な空間理解からの離脱は、はるかに強い程度で、行為理論やシステム理論のアプローチによって特徴付けられる。これらは1980年代中頃から因果論的な空間法則に基づく空間科学的な考えを批判し、その反対にどのようにして空間が日常的な行為やコミュニケーションの中で生産・再生産されているのかを研究してきた。ドイツ語圏人文地理学においては、ここではベノ・ヴェーレンによる行為理論的な構想が特に指針としての役割を果たした。彼の構想は、どのようにして意思をもって行動する主体がその日常的な行為の中で空間を(再)生産するのかを調査することを目指している (Werlen 1987, 1995, 1997)。空間と空間的な構造は、ヴェーレンに従えば、人間による行為の産物でもあり、同時にその始まりを規定する条件でもある。その際にこの諸条件は物理—物質的な存在にのみ関わるのではなく、行為の文脈における社会—文化的そして主観的な構成要素とも関わる。ヘル

ムート・クリューターはそれと反対に、主体でも行為でもなくコミュニケーションを社会の礎石として理解するルーマン的なシステム理論への熟考を引き継いでいる。彼は、空間が「社会的コミュニケーションの要素」としてどのような機能を持っているのかを明らかにすることを目指した (Klüter 1986, 1987, 1994, 1999)。より後の研究は、ルーマン的なシステム理論の理論体系へのより厳格で抜本的な取り組みに基づいてこのアプローチを推し進め、空間の意味論を観察の特定の形態として——社会的な関係の複雑さを削減する意味論として——取り上げる (Miguelbrink und Redepenning 2004; Pott 2005; Redepenning 2006)。

最終的に、マルクス主義的を志向した地理学も、行為理論を志向した地理学も、またシステム理論を志向した地理学も、社会实践や社会構造を通じて空間の構築が特徴付けられているということを前提としている。空間は社会的な実践や構造の表現や帰結として——社会的に構築されたものとして——考えられている。

言説的に構成されたものとしての空間

社会的な実状と空間性との間の関連は、言説を志向したアプローチにおいてはよりラディカルに捉えられ、社会構造や行為主体は決して固定的なものではなく、常に矛盾を孕んだ、不安定で破断しうるものとされる。従って、空間もまた特定の社会構造やプロセスの帰結として捉えられることはない。空間の構成はこの際、常に社会の構成の一部分である。この視角の根本は、1990年代のはじめから英語圏地理学で、また1990年代の終わりからはドイツ語圏地理学でも受容された文化論的転回と関連したポスト構造主義的なアプローチの受容にある。ポスト構造主義的なアプローチは、社会の固定的なマクロ構造という考えも、また自律的な主体というイメージも批判する。空間性と社会との関係に関しては、社会構造の次元、または個人の次元においてこの双方が緊密に絡み合っているということがここで重要になる。とくにドリーン・マッセイ (Massey 1999, 2005) は、空間は社会的な生産の結果としてのみ理解されるものではなく、同時に空間の構成は社会の構成における不可欠な要素であると主張する。「...空

間は今や、新しさの創出や生産のための部分 (不可欠な部分) として解釈される。つまり、ここにおける問題は空間の生産を強調することではなく、空間それ自身が社会の生産にとって必要不可欠であるということだ。」 (Massey 1999: 10; 強調は原文より)⁶⁾

これらを背景に、近年では言説理論的なアプローチの概念的-経験的な [heuristisch (英: heuristic)] 可能性が議論されるようになった。ここでの中心的な論点は、(特に『私たち/彼ら』のような) 社会的な差異化が(特に『こちら/あちら』のような) 空間的な差異化と結びつくことによって、社会的な差異化が客観視され、自然化されるという点にある。従って、特定の空間の構成は、支配的な社会秩序の言説的な生産の重要な要素となる。

テキストや他の記号システム (絵画や映画、地図、具体的には風景画や建築的な景観など) における空間性の構成の研究は、一つの重要な研究領域となる。事物の持つ、言語的および視覚的なシンボリック形態と (例えば国境の柵や、吹雪といった)、物理-物質的な質との間の関係を、どのように研究実践において手法化するのか、あるいはその基本的な考えのあり方は、活発な議論的となっている。フーコーに依拠した研究は、「言説」(言語的-シンボリック次元) と「装置」[Dispositiv (仏: dispositif)] (実践、制度、物質性、テキストを取り囲むようにして行われる意味の生産) とを部分的に分けて考える。ラクラウとムフの言説理論的な著作をより志向した研究では、言説と言説の外、のように圏域が分けられることはない。むしろ、全ての事物や社会的な現象が、言説の産物として理解される。しかしながら、その際にはどの程度ラクラウとムフが物質的な対象に社会的な現実の生産におけるアクティヴな役割をも委ねるのかという点は、開かれたままになる (第5章および Glasze/Mattisek 2021 を参照)。

more-than-representational geographies および *物質論的転回 material turn* (上記参照) をめぐる論争を背景に、2010年代以降のポスト構造主義的および言説理論的なアプローチの敷衍の中では、物質的および非-物質的な諸要素のそれぞれ特有の位相的な結びつきとして空間性を概念化する空間の着想がより一層議論されてきた。新しい「デジタル地理学」の領域からの研究は、社会的現実の構成に対す

6) 一面では空間/物質性を、もう一面では社会的な関係を産出するこの二面的な生産の理解に対しては、特にジェンダー研究が影響力に富んでおり、それらは身体の物理的な存在と (ジェンダー化された) アイデンティティの社会的な構成とを概念的には互いに切り離せないものであることを浮き彫りにした (Butler 1997 [1993], 2004)。むしろ、それぞれの社会的な立ち位置も物理的な物質化を必要としており、そしてこの物質化の持つそれぞれの形態を通じて社会的な関係も決定的に特徴付けられている。

る技術の重要性の増大によって、象徴的—記号的そして物理的な次元が多様な仕方によって一致してゆくことを示唆しており（例えばBoeckler 2014; Glasze 2015; Wiertz/Schopper 2019を参照）、このことを「ハイブリッドな空間 [hybride Räumen (英: hybrid spaces)]」(de Souza e Silva 2006), 「code-space」(Kitchin/Dodge 2011)あるいは「論証された空間 [argumentierte Räumen (英: argued spaces)]」(Graham 2017)のような新しい概念化によって表している。

全体として、空間の言説理論的な理解に際しては、第一に社会的なもの（例えば主体のアイデンティティや、あるいは社会的な不均衡関係）はそれぞれ固有の仕方によって引き起こされたものとして概念化される。つまり、これらは常に一時的に固定されたものとして、一貫して矛盾を孕んだものとして、それぞれの物質的または空間的な表現形を変化させ続けているものとして概念化され、第二に、その際空間の構成は社会の構成の重要な一部分として考えられる。

6. 言説研究の社会との関連性について

言説理論を志向したアプローチはしばしば、社会的あるいは政治的に関連性の低いものとして、あるいは解放や進歩を志向する学問という理念にとって全く有害なものとして非難される。実際に言説理論的なアプローチは、科学が絶対的な真実を発見し、また表すべきであるという考えへと向いた、近代において確立された科学理解と統合していく部分はほぼ無い。しかし、言説理論が、社会に対して（そう思われているところの）絶対的に真の認識を提供すること（例えば空間科学の量的—分析的なアプローチが到達しようとしたもの）や、社会的な諸関係を外的な視点から把握し、批判すること（例えばマルクス主義を志向したラディカル地理学がその大部分において行おうとしたもの）を前提としないのならば——そのような学問的試みにはどのような役割や正当性があるのだろうか？

言説理論的なアプローチに基づけば、社会的な現実はいわゆる偶然的な、つまり原則として変更可能なものとして概念化される。従って、外見上は所与の、「通常の [normal: 規範的・標準的な]」ものとして受け入れられている社会の構造化の原理が問題化され得ると同時に、見かけの上では所与で固定化された状況において行為の持つ余地が明らかにされ得る。言説理論的な研究は、特定の社会的な現実や権力諸関

係がどのように生産されるのかを明らかにしようとし、また従ってこれらの諸関係の変更可能性も明示したり、場合によってはその変化に向けた基礎も提供しようとする。

このことは、例えば言説理論を志向したジェンダー研究や、ポストコロニアリズム、そして政治地理学の仕事に当てはまる。これらは、「ジェンダー」や「エスニシティ」、あるいは「ナショナリティ」といった社会的なカテゴリーが客観的に与えられたものではなく、アイデンティティ化や線引きのパフォーマティブな諸実践の中で常に新たに構成されていることに対する意識を生み出すことに貢献してきた。同様の意味で、例えば安全保障の側面のより殊更な強調や、多くの社会的な領域の経済的合理化といった昨今の社会的な動向に取り組んでいる研究は、社会的な関係をその構築性、従ってその原理的な変更可能性において白日の下に晒すことを目指している。

その際に言説研究は、知と権力の結びつきに対して敏感になる。つまり言説研究は、特定の、そして常に権力を通じた文脈において、ある特定の知が、どのように特定の真実を、従って究極的には特定の社会的現実を確立し、そして実現することができるのかを浮き彫りにする。同時に言説研究は、どのような権力効果が発生し、いつ特定の社会的現実が確立され、また他の現実が確立されないのかという問い立てにも目を向ける。

言説研究は従って、オルタナティブな社会的現実を考えられうるもの、また形成されうるものとすることによって、変化のための機会もまた開いてゆく。あるインタビューの中で、言説理論家としてのフォーコは以下のように述べている。

「私の役割——これは強調されすぎた言葉なのですが——は、人々に対して、彼らは彼らが感じている以上に自由であること、彼らは歴史の中のどこか一時点で立ち上げられた幾つかのテーマを真実として、確固とした証拠として受け入れているということ、そしてこのいわゆる証拠は批判され、そして破壊され得るということを示すことなのです。」(Foucault/Martin 1988[1982])

言説理論はこれに加えて、政治的な論争の新しい着想のための基礎も提供する。言説理論的なアプローチにおいては、アイデンティティは決して所与のものでも、決して永続的なものでもなく、またそうであるなら政治的な論争の中で相手側に対する眼

差しも変わっていくということが前提とされる。これは従って本来的根本的に他者であるところの「敵」なのではなく、一つの常に開かれた、そして変更可能な論争における正当な相手なのである (Laclau/Mouffe 1985; Laclau 1996)。

しかしながら、「ポストファクツ的な」論争および(右派一)ポピュリズム的な動向がその[社会的]意味を増したことを背景に、多くの作家らはポスト構造主義的および言説理論的なアプローチを批判し、これを近代の学問が持つ特権的かつ普遍的な真実への要請の放棄を準備した草分け(突出的なものは、例えばMcIntyre 2018)であるとみなした(この批判により言説理論的な理念が持った課題について、基礎的なことはすでにLatour 2004にあるので参照のこと、社会地理学者による視点からは例えばOßenbrügge 2018を参照)。大抵の場合いくらか散発的に「ポストモダンの」社会科学および文化研究に向けられるこの非難の核心はつまり、どのような真実も構築されたものであるという考えは、普遍主義的な表象を掘り崩すのみでなく、真実へのいかなる要求も相対化してしまうことを招くというものだ。そうであれば、例えば気候変動を否定する者が、人間によって引き起こされた気候変動に関する広く受け入れられている自然科学のコンセンサスを、彼ら独自の「オルタナティブな真実」と等価なものとして対置させることも可能となってしまう。同様に、普遍主義への批判は、例えば「新右翼的な」運動の「民族多元主義的な」概念の中で、人権がその普遍的な有効性を否定されるということも可能にするかもしれない(例えばフランスにおける新右翼の思想家de Benoist 2004の論難書を参照)。

これらを背景に、昨今では部分的に——特に自然科学者らによって——学問の持つ特権的な真理への要求の強化や再一確立が説かれている。そのようにして、「*marches for science*」の文脈の中で数千もの研究者たちが、政治や社会による学問的な知見の自律性への承認や顧慮を要求した(社会科学的な視角からのこれへの批判はOßenbrügge 2018を、またより強く哲学的な視角からの批判はVogelmann 2019を参照)。

言説理論的な視角においては、この批判への以下に続く解答が形作られる。つまり、言説研究が真実生産の規則を浮き彫りにしながら調査するのは、どのようにして特定の真実が確立されるのかであるということだ。従って言説研究が提供するものは、真実への要求および正当化の様々に異なった戦略を弁別するための道具である。従って、その際に言説研究

が前提とするものは必ずしも、全ての真実への要求や、あるいは全ての社会的現実が等価であるだろうということではなく、むしろ言説研究はこの仕方によって、真実と知の生産の異なったプロセスや戦略の弁別に貢献することができる(同様にAngermüller 2018も参照のこと)。その中でさまざまな真実への要求が矛盾をもって語られるような状況において、そのような差異化は、——例えば気候変動に関する論争の中においても——批判の(立場づけられた)定式化のための方向づけや、基礎を提供する。

そのようにして言説研究は、知見の生産がプロセスを含んでいることに目を向け、それにより知の生産の質に関する取り組みをより強める。例えばこの仕方によって、自然科学の中には、その中で長年にわたり確立され、常に議論の対象とされ、そして洗練されたていった、自然科学的かつ実験からもたらされ、モデル化された手続きに基づいて、間主観的に後づけることができる知見が生産されている、広大な領域が確認できる。気候変動を否定する者のさまざまな立場は、これと反対のものであり、それらはそれらの主題を、ふさわしい、方法的に照会されていて且つ後づけることができるような防護されたプロセスの上におよそ展開してはいない。従って、言説理論的な視角に基づけば、気候変動をめぐる議論における自然科学的な知見は、(あまりに)簡単に(自然一)科学のアプリオリを書き換えることなしに、また真実への直接の到達の存在なしに、また社会的な影響から自由となることなしに、守られることができる。

言説研究の要求は究極的には、カテゴリーと「真実」を常に生産されたものとして把握することであり、これは研究者の位置付けへの帰結をもたらす(Howarth/Glynos/Griggs 2016を参照)。というのも、何が社会的な問題として、あるいは興味深いテーマとして認識されるのか、そしてなぜ特定のテーマが「理にかなって、必然的に」学問的に取り扱われるのかという問いが、すでに偶有的であり、特定の言説的な文脈の中における立ち位置からのみ理解され得るからである。同一のことは、理論的な視角の選択とその経験的な手法化においても当てはまる。この意味で、本書に記された理論的・手法的な入り口と、それらをより明らかにする為の経験的な例も、学術的(言説的)な文脈における著者らの方向性や立ち位置を反映している。ここに集められた各章の多くは、知や真実、権力構造や日常生活における実践の間にある連関をテーマ化していくような理論的な視角や手法的な手続きを、人文地理学的な研究プロジェク

トの体系化や取り扱いのために利用するという点で、その関心を一致させている。本書の重点はその際、構造主義的、ポスト構造主義的な構構の可能性と限界を探ることに置かれる——従って、本書はより主体そのものに関係した研究からははっきりと異なっている。

7. 本書の構成

2009年に刊行された第1版から、いくつかの変更が加えられた。最も重要な刷新は、このハンドブックの基本構造が拡張され、また更新されたことにある。前半の2つの部、「人文地理学における言説研究の理論と概念(第1部)」および「言説研究における空間概念(第2部)」は今日的に改変され、また拡張された。全く新しいのは、「社会—空間関係の言説的な構成の様式(第3部)」である。編者らがこれを導入した理由は、第1版では一方に理論と概念、他方に手法や経験的研究の入り口というような差異化が企図された一方で、これが不十分なままであったことにある。特に、手法を論ずる章においては多くの非常に異なった言説性の様式が参照されていた。新しい第3部の各章ではまず、いくつかの異なった言説性の様式(言語的、図像的、行為的なものや、諸実践、技術および物質性)がどのように概念化され得るのかの基本的な議論が行われ、それを基に後に続く手法に関する章のための方法論的な基礎が与えられる。次いで第4部では、第3部に基づいた展開として、諸手法および経験的な研究への入り口がテーマ化される。これらは、それぞれに異なった経験的な研究(テキスト、地図、監視、写真)への入り口へと関連付けられる。このハンドブックの構成においては、それぞれ4つの部の最初に、それらへの短い導入が個別の章の形をとって置かれている。もう一つこのハンドブックにおいて新しいことは、第5部の最終章において、「真実の戯れへと足を踏み入れる」の標語の下、共同執筆者らが数年にわたり常に取り組んできた、空間と関連した言説研究における一連の上位の問いが議論されていることである。この中には、私たち自身の立ち位置や研究者としての政治的な場所取りだけでなく、言説理論を志向した研究プロセスにおける諸手法の位置づけも含まれることとなる。

参考文献

- Althusser, Louis (1977 [1970]): *Ideologie und ideologische Staatsapparate. Aufsätze zur marxistischen Theorie*, Hamburg/Berlin: VSA. 以下の文献を参考にした: 西川長夫ほか訳, 再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置(上/下). 2010, 平凡社
- Anderson, James (1973): *Ideology in geography. An introduction*, in: *Antipode* 5 (3), S. 1-6.
- Angermüller, Johannes (2005): „Sozialwissenschaftliche Diskursanalyse in Deutschland: zwischen Rekonstruktion und Dekonstruktion“, in: Keller, Reiner et al. (Hg.), *Die diskursive Konstruktion von Wirklichkeit*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft, S. 23-48.
- Angermüller, Johannes (2007): *Nach dem Strukturalismus. Theoriediskurs und intellektuelles Feld in Frankreich*, Bielefeld: transcript.
- Angermüller, Johannes (2014a): „Einleitung: Diskursforschung als Theorie und Analyse. Umriss eines interdisziplinären und internationalen Feldes“, in: Angermüller, Johannes et al. (Hg.), *Diskursforschung. Ein interdisziplinäres Handbuch*, Bielefeld: transcript, S. 16-36.
- Angermüller, Johannes (2014b): *Poststructuralist Discourse Analysis. Subjectivity in Enunciative Pragmatics*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Angermüller, Johannes (2018): „Truth after post-truth: for a Strong Programme in Discourse Studies“, in: *Palgrave Commun* 4 (1), S. 13.
- Angermüller, Johannes/Nonhoff, Martin/Herschinger, Eva/Macgilchrist, Felicitas/Reisigl, Martin/Wedl, Juliette/Wrana, Daniel/Ziem, Alexander (Hg.) (2014): *Diskursforschung. Ein interdisziplinäres Handbuch*, Bielefeld: transcript.
- Anshelm, Jonas/Hultman, Martin (2015): *Discourses of Global Climate Change. Apocalyptic framing and political antagonisms*, London/New York: Routledge.
- Arnreiter, Gerhard/Weichhart, Peter (1998): „Rivalisierende Paradigmen im Fach Geographie“, in: Schurz, Gerhard/Weingartner, Paul (Hg.), *Koexistenz rivalisierender Paradigmen. Eine post-kuhnische Bestandsaufnahme zur Struktur gegenwärtiger Wissenschaft*, Opladen/Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, S. 53-85.
- Austin, John L. (1972 [1962]): *Zur Theorie der Sprechakte*, Stuttgart: Reclam. 飯野 勝己訳, 言語と行為——いかにして言葉でものごとを行うか. 2019, 講談社
- Bachmann, Veit/Müller, Martin (2015): *Perceptions of the EU in Eastern Europe and Sub-Saharan Africa – Looking in from the Outside*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, <http://www.palgrave.com/de/book/9781137405463>
- Bachmann, Veit/Sidaway, James D. (2016): „Brexit geopolitics“, in: *Geoforum* 77, S. 47-50, <https://doi.org/10.1016/j.geoforum.2016.10.001>
- Bachmann-Medick, Doris (2006): *Cultural turns: Neuorientierungen in den Kulturwissenschaften*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt.

- Barthes, Roland (1985 [1967]): *Die Sprache der Mode*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 佐藤信夫訳。モードの体系——その言語表現による記号学的分析, 1972. みすず書房
- Baumann, Christoph/Tijé-Dra, Andreas/Winkler, Jan (2015): „Geographien zwischen Diskurs und Praxis – Mit Wittgenstein Anknüpfungspunkte von Diskurs- und Praxistheorie denken“, in: *Geographica Helvetica* 70 (3), S. 225-237.
- Bauriedl, Sybille/Fleischmann, Katharina/Strüver, Anke/Wucherpennig, Claudia (2000): „Verkörperte Räume – ‚verräumte‘ Körper. Zu einem feministisch-poststrukturalistischen Verständnis der Wechselwirkungen von Körper und Raum“, in: *Geographica Helvetica* 55 (2), S. 130-137.
- Bauriedl, Sybille/Schurr, Carolin (2014): „Zusammenprall der Identitäten. Soziale und kulturelle Differenz in Städten aus Sicht der feministischen Forschung“, in: Vogelpohl, Anne/Oßenbrügge, Jürgen (Hg.), *Theorien in der Raum- und Stadtforschung? Einführungen*, Münster: Westfälisches Dampfboot, S. 136-155.
- Belina, Bernd (2006): *Raum, Überwachung, Kontrolle. Vom staatlichen Zugriff auf städtische Bevölkerung*, Münster: Westfälisches Dampfboot.
- Belina, Bernd (2013): *Raum (= Einstiege, Band 20)*, Münster: Westfälisches Dampfboot.
- Belina, Bernd/Dzudzek, Iris (2020): „Diskursanalyse als Gesellschaftsanalyse – Ideologiekritik und Kritische Diskursanalyse“, in: Glasze, Georg/Mattisek, Annika (Hg.), *Handbuch Diskurs und Raum. Theorien und Methoden für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung*, Bielefeld: transcript, S. 109-135.
- Belina, Bernd/Michel, Boris (2007): „Raumproduktionen. Zu diesem Band“, in: Belina, Bernd/Michel, Boris (Hg.), *Raumproduktionen: Beiträge der Radical Geography: eine Zwischenbilanz*, Münster: Westfälisches Dampfboot, S. 7-34.
- Benoist, Alain de (2004): *Kritik der Menschenrechte. Warum Universalismus und Globalisierung die Freiheit bedrohen*, Berlin: Junge Freiheit.
- Berndt, Christian/Boeckler, Marc (2005): „Kulturelle Geographien der Ökonomie“, in: *Zeitschrift für Wirtschaftsgeographie* 49 (2), S. 1-16.
- Berndt, Christian/Pütz, Robert (2007): „Kulturelle Geographien nach dem Cultural Turn“, in: Berndt, Christian/Pütz, Robert (Hg.), *Kulturelle Geographien. Zur Beschäftigung mit Raum und Ort nach dem Cultural Turn*, Bielefeld: transcript, S. 7-25.
- Bhabha, Homi (1994): *The location of culture*, London/New York: Routledge.
- Bitner, Christian/Glasze, Georg/Turk, Catherine (2013): „Tracing contingencies. Analyzing the political in assemblages of web 2.0 cartographies“, in: *GeoJournal* 78 (6), S. 935-948.
- Boeckler, Marc (2014): „Neogeographie, Ortsmedien und der Ort der Geographie im digitalen Zeitalter“, in: *Geographische Rundschau* 66 (6), S. 4-11.
- Bröckling, Ulrich (2007): *Das unternehmerische Selbst. Soziologie einer Subjektivierungsform*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp.
- Bruns, Bettina/Zichner, Helga (2009): „Übertragen – Übersetzen – Aushandeln? Wer oder was geht durch Übersetzung verloren, oder kann etwas gewonnen werden?“, in: *Social Geography Discussion* 5, S. 71-96.
- Bublitz, Hannelore (2003): *Diskurs*, Bielefeld: transcript.
- Butler, Judith (1990): *Gender trouble. Feminism and the subversion of identity*, New York: Routledge. 竹村和子訳。ジェンダー・トラブル, 2018年, 青土社.
- Butler, Judith (1997 [1993]): *Körper von Gewicht. Die diskursiven Grenzen des Geschlechts*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 佐藤嘉幸監訳。問題=物質(マター)となる身体——「セックス」の言説的境界について, 2021年, 以文社.
- Butler, Judith (2004): *Undoing gender*, New York: Routledge. 佐藤嘉幸・清水知子訳。自分自身を説明すること——倫理的暴力の批判, 2008年, 月曜社.
- Castro Varela, María do Mar/Dhawan, Nikita (2005): *Postkoloniale Theorie: eine kritische Einführung*, Bielefeld: transcript.
- Crane, Lucy G./Lombard, Melanie B./Tenz, Eric M. (2009): „More than just translation: challenges and opportunities in intercultural and multilingual research“, in: *Social Geography Discussion* 5, S. 51-70.
- Crang, Mike/Thrift, Nigel (Hg.) (2000): *Thinking space*, London: Routledge.
- Davis, Mike (Hg.) (1990): *City of quartz. Excavating the future in Los Angeles*, London/New York: Verso. 村山敏勝訳。要塞都市 LA, 2008年, 青土社.
- Deleuze, Gilles/Guattari, Félix (1992): *Tausend Plateaus. Kapitalismus und Schizophrenie*, Leipzig: Merve. 宇野邦一, 豊崎光一訳。千のプラトー, 1994. 河出書房.
- Derrida, Jacques (1972 [1967]): *Die Schrift und die Differenz*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 合田正人, 谷口博史訳。エクリチュールと差異, 2013. 法政大学出版局.
- Derrida, Jacques (1974 [1967]): *Grammatologie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 足立和浩訳。根源の彼方に: グラマトロジーについて, 1990. 現代思潮社.
- Diaz-Bone, Rainer (2002): *Kulturwelt, Diskurs und Lebensstil. Eine diskurstheoretische Erweiterung der bourdieuschen Distinktionstheorie*, Opladen: Leske + Budrich.
- Diaz-Bone, Rainer (2006): „Zur Methodologisierung der Foucaultschen Diskursanalyse“, in: *Forum Qualitative Sozialforschung* 7 (1), Art. 6, <http://www.qualitative-research.net/fqs-texte/1-06/06-1-6-d.htm>.
- Diaz-Bone, Rainer/Krell, Gertraude (Hg.) (2015): *Diskurs und Ökonomie: Diskursanalytische Perspektiven auf Märkte und Organisationen. Interdisziplinäre Diskursforschung*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, <https://www.springer.com/de/book/9783531199863>
- Dijk, Teun A. van (2015): „Critical discourse analysis“, in: Schiffrin, Deborah/Tannen, Deborah/Hamilton, Heidi E. (Hg.), *The handbook of discourse analysis*, Malden/Oxford: Blackwell, S. 466-485.
- Döring, Jörg/Thielmann, Tristan (Hg.) (2008): *Spatial turn. Das*

- Raumparadigma in den Kultur- und Sozialwissenschaften*, Bielefeld: transcript.
- Dzudzek, Iris (2016): *Kreativpolitik: Über die Machteffekte einer neuen Regierungsform des Städtischen (= Sozial- und Kulturgeographie, Band 13)*, Bielefeld: transcript.
- Eco, Umberto (1994 [1968]): *Einführung in die Semiotik*, München: UTB.
- Eeden, Pepijn van (2017): „Materializing discourse analysis with James, Schmitt and Latour“, in: *Palgrave Commun* 3 (1), S. 243.
- Ells, Mark van (1999): No blood for oil: protesting the Persian Gulf war in Madison, Wisconsin. *Journal for the Study of Peace and Conflict 1998/1999*, <http://jssc.library.wisc.edu/issues/1998-1999/contents.html>.
- Escher, Anton/Petermann, Sandra (Hg.) (2016): *Raum und Ort (= Basistexte Geographie, Band 1)*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Fairclough, Norman (1995): *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*, London: Longman.
- Fairclough, Norman (2013): *Critical discourse analysis: The critical study of language*, Abingdon/New York: Routledge.
- Fall, Juliet J. (2005): Michel Foucault and Francophone geography. Circulations, conversions and disappearances, <http://www.espacestemp.net/document1540.html>.
- Feustel, Robert/Keller, Reiner/Schrage, Dominik/Wedl, Juliette/Wrana, Daniel (2014): „Zur method(olog)ischen Systematisierung der sozialwissenschaftlichen Diskursforschung“, in: Angermüller, Johannes et al. (Hg.), *Diskursforschung. Ein interdisziplinäres Handbuch*, Bielefeld: transcript, S. 482-506.
- Filep, Bela (2009): „Interview and translation strategies: coping with multilingual settings and data“, in: *Social Geography Discussion* 5, S. 25-49.
- Fleischmann, Katharina/Meyer-Hanschen, Ulrike (2005): Stadt Land Gender. Einführung in *Feministische Geographien, Königstein im Taunus*: Helmer.
- Flitner, Michael (1998): „Konstruierte Naturen und ihre Erforschung“, in: *Geographica Helvetica* 53 (3), S. 89-95.
- Foucault, Michel (1971 [1966]): *Die Ordnung der Dinge*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 渡辺一民, 佐々木明訳, 言葉と物: 人文科学の考古学, 1974. 新潮社
- Foucault, Michel (1973 [1969]): *Archäologie des Wissens*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 中村雄二郎訳, 知の考古学, 1981. 河出書房新社.
- Foucault, Michel (1976 [1975]): *Überwachen und Strafen. Die Geburt des Gefängnisses*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 田村俊訳, 監獄の誕生: 監視と処罰, 2020. 新潮社.
- Foucault, Michel (1988): „Technologies of the self“, in: Martin, Luther H./Gutman, Huck/Hutton, Patrick (Hg.), *Technologies of the self. A seminar with Michel Foucault*, London: Tavistock, S. 16-49. 田村俊, 雲和子訳, 自己のテクノロジー: フーコー・セミナーの記録, 1990. 岩波書店.
- Foucault, Michel (2006a [1979]): *Die Geburt der Biopolitik. Geschichte der Gouvernementalität II*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 慎改康之訳, 生政治の誕生: コレージュ・ド・フランス講義 1978-1979年度, 2008. 筑摩書房.
- Foucault, Michel (2006b [1978]): *Sicherheit, Territorium, Bevölkerung. Geschichte der Gouvernementalität I*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 高桑和巳訳, 安全・領土・人口: コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度, 2007. 筑摩書房.
- Foucault, Michel/Martin, Rux (1988 [1982]): „Truth, power, self: An interview with Michel Foucault“, in: Martin, Luther H./Gutman, Huck/Hutton, Patrick (Hg.), *Technologies of the self. A seminar with Michel Foucault*, London: Tavistock, S. 9-15.
- Füller, Henning/Glasze, Georg (2014): „Sicherheit, Prävention und Verortung“, in: *Geographische Rundschau* 66 (9), S. 4-7.
- Füller, Henning/Marquardt, Nadine (2009): *Die Sicherstellung von Urbanität*, Münster: Westfälisches Dampfboot.
- Füller, Henning/Marquardt, Nadine (2010): *Die Sicherstellung von Urbanität (= Raumproduktionen 8)*, Münster: Westfälisches Dampfboot.
- Füller, Henning/Marquardt, Nadine (2020): „Gouvernementalität in der humangeographischen Diskursforschung“, in: Glasze, Georg/Mattisek, Annika (Hg.), *Handbuch Diskurs und Raum. Theorien und Methoden für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung*, Bielefeld: transcript, S. 87-107.
- Germes, Mélina/Glasze, Georg (2010): „Die banlieues als Gegenorte der République. Eine Diskursanalyse neuer Sicherheitspolitiken in den Vorstädten Frankreichs“, in: *Geographica Helvetica* 65 (3), S. 217-228.
- Glasze, Georg (2007): „Vorschläge zur Operationalisierung der Diskurstheorie von Laclau und Mouffe in einer Triangulation von lexikometrischen und interpretativen Methoden“, in: *FQS – Forum Qualitative Sozialforschung* 8 (2), <http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/view/239> vom 01.02.2009.
- Glasze, Georg (2013): *Politische Räume. Die diskursive Konstitution eines „geokulturellen Raums“ – die Frankophonie*, Bielefeld: transcript.
- Glasze, Georg (2015): „Neue Kartografien, neue Geografien: Weltbilder im digitalen Zeitalter“, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte* 65 (41-42), S. 29-37.
- Glasze, Georg/Mattisek, Annika (2014): „Diskursforschung in der Humangeographie“, in: Angermüller, Johannes et al. (Hg.), *Diskursforschung. Ein interdisziplinäres Handbuch*, Bielefeld: transcript, S. 208-223.
- Glasze, Georg/Mattisek, Annika (2020): „Die Hegemonie- und Diskurstheorie von Laclau und Mouffe“, in: Glasze, Georg/Mattisek, Annika (Hg.), *Handbuch Diskurs und Raum. Theorien und Methoden für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung*, Bielefeld: transcript, S. 137-166.
- Glasze, Georg/Pütz, Robert/Rolfes, Manfred (Hg.) (2005): *Diskurs – Stadt – Kriminalität. Städtische (Un-)Sicherheiten aus der Perspektive von Stadtforschung und Kritischer Kriminalgeographie*, Bielefeld: transcript.
- Glasze, Georg/Wullweber, Joscha (2014): „Räume sind politisch!

- Die Perspektive der Diskurs- und Hegemonietheorie“, in: Obenbrügge, Jürgen/Vogelpohl, Anne (Hg.), *Theorien in der Raum- und Stadtforschung. Einführungen*, Münster: Westfälisches Dampfboot, S. 234-250.
- Graham, Mark (2017): „Digitally Augmented Geographies“, in: Kitchin, Rob/Lauriault, Tracey P./Wilson, Matt W. (Hg.), *Understanding spatial media*, Los Angeles u.a.: SAGE, S. 44-55.
- Gregory, Derek (1994): *Geographical imaginations*, Cambridge: Blackwell.
- Grice, Paul (1975): „Logic and conversation“, in: Cole, Peter/Morgan, Jerry (Hg.), *Syntax and semantics 3: speech acts*, New York: Academic Press, S.41-58.
- Günzel, Marian (2016): *Planung zwischen Konflikt und Diskurs. Zur Rolle von Diskursen im Verlauf planungsbezogener Raumnutzungskonflikte*, Dortmund: Selbstverlag der TU Dortmund.
- Günzel, Stephan (2008): „Spatial Turn – Topographical Turn – Topological Turn. Über die Unterschiede zwischen Raumparadigmen“, in: Döring, Jörg/Thielmann, Tristan (Hg.), *Spatial Turn. Das Raumparadigma in den Kultur- und Sozialwissenschaften*, Bielefeld: transcript.
- Günzel, Stephan (2017): *Raum (= Edition Kulturwissenschaft, Band 143)*, Bielefeld: transcript.
- Hajer, Maarten A. (1995): *The politics of environmental discourse. Ecological modernization and the policy process*, Oxford: Clarendon Press.
- Hall, Stuart (1994): *Rassismus und kulturelle Identität. Ausgewählte Schriften 2*, Berlin/Hamburg: Argument.
- Hall, Stuart (1999 [1989]): „Ethnizität: Identität und Differenz“, in: Engelmann, Jan (Hg.), *Die kleinen Unterschiede: Der Cultural-Studies-Reader*, Frankfurt a.M.: Campus, S. 33-98.
- Hard, Gerhard (1986): „Der Raum – einmal systemtheoretisch gesehen“, in: *Geographica Helvetica 41 (2)*, S. 77-83.
- Hérodote (Hg.) (1976): „Questions à Michel Foucault sur la géographie“, in: *Hérodote 1 (1)*, S. 71-85.
- Howarth, David/Glynos, Jason/Griggs, Steven (2016): „Discourse, explanation and critique“, in: *Critical Policy Studies 10 (1)*, S. 99-104.
- Huntington, Samuel P. (1993): „The clash of civilizations?“, in: *Foreign Affairs 72 (3)*, S. 22-49.
- Hussein, Shadia (2009): „Die Macht der Übersetzung. Konzeptionelle Überlegungen zur Übersetzung als politische Praktik am Beispiel kulturgeographischer Forschung im arabischen Sprachraum“, in: *Social Geography 5*, S. 145-172.
- Hussein de Araújo, Shadia (2011): *Jenseits vom „Kampf der Kulturen“. Imaginative Geographien des Eigenen und des Anderen in arabischen Printmedien (= Postcolonial Studies)*, Bielefeld: transcript.
- Institute of British Geographers Women and Geography Study Group (1997): *Feminist geographies: Explorations in diversity and difference*, Harlow: Longman.
- Keller, Reiner (2004): *Diskursforschung. Eine Einführung für SozialwissenschaftlerInnen*, Opladen: Leske + Budrich.
- Keller, Reiner (2005): *Wissenssoziologische Diskursanalyse. Grundlegung eines Forschungsprogramms*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Keller, Reiner (2011): „Wissenssoziologische Diskursanalyse“, in: Keller, Reiner et al. (Hg.), *Handbuch sozialwissenschaftliche Diskursanalyse*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, S. 125-159.
- Kitchin, Rob/Dodge, Martin (2011): *Code/space – Software and everyday life*, Cambridge: MIT Press.
- Klüter, Helmut (1986): *Raum als Element sozialer Kommunikation*, Gießen: Selbstverlag des Geographischen Instituts der Justus-Liebig-Universität.
- Klüter, Helmut (1987): „Räumliche Orientierung als sozialgeographischer Grundbegriff“, in: *Geographische Zeitschrift 75 (2)*, S. 86-98.
- Klüter, Helmut (1994): „Raum als Objekt menschlicher Wahrnehmung und Raum als Element sozialer Kommunikation“, in: *Mitteilungen der Österreichischen Geographischen Gesellschaft 136*, S. 143-178.
- Klüter, Helmut (1999): „Raum und Organisation“, in: Meusbürger, Peter (Hg.), *Handlungszentrierte Sozialgeographie. Benno Werlens Entwurf in kritischer Diskussion*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, S. 187-212.
- Krasmann, Susanne (2003): *Die Kriminalität der Gesellschaft. Zur Gouvernementalität der Gegenwart*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.
- Krüger, Timmo (2015): *Das Hegemonieprojekt der ökologischen Modernisierung. Die Konflikte um Carbon Capture and Storage (CCS) in der internationalen Klimapolitik*, Bielefeld: transcript.
- Kutschinske, Karin/Meier, Verena (2000): „... sich diesen Raum zu nehmen und sich freizulaufen ...“. Angst-Räume als Ausdruck von Geschlechterkonstruktionen“, in: *Geographica Helvetica 55 (2)*, S. 138-145.
- Lacan, Jacques (1973 [1966]): *Schriften I. Das Werk von Jacques Lacan*, Berlin: Quadriga.
- Laclau, Ernesto (1996): „Deconstruction, pragmatism, hegemony“, in: Mouffe, Chantal (Hg.), *Deconstruction and pragmatism*, New York: Routledge, S. 47-67.
- Laclau, Ernesto (2005): *On populist reason*, London/New York: Verso. 河村一郎訳. ポピュリズムの理性. 2018. 明石書店.
- Laclau, Ernesto/Mouffe, Chantal (1985): *Hegemony & socialist strategy: towards a radical democratic politics*, London: Verso. 西永 亮, 千葉 眞訳. 民主主義の革命: ヘゲモニーとポスト・マルクス主義. 2012. 筑摩書房.
- Langedoen, Terence/Savin, Harris (1971): „The projection problem for presuppositions“, in: Fillmore, Charles/Langedoen, Terence (Hg.), *Studies in linguistic semantics*, New York: Holt, Rinehart & Winston, S. 55-62.
- Latour, Bruno (1996): „On actor-network theory. A few classifications“, in: *Soziale Welt 47 (4)*, S. 369-381.
- Latour, Bruno (2004): „Why Has Critique Run out of Steam? From Matters of Fact to Matters of Concern“, in: *Critical Inquiry 30*, S.

- 225-248. 伊藤 嘉高訳, 批判はなぜ力を失ったのか: 〈敵然たる事実〉から〈議論を呼ぶ事実〉へ, エクリヲ (12) pp.198-230. 2020. 映画美学学校批評家養成ギブス第三期有志一同.
- Lees, Loretta (2004): „Urban geography: discourse analysis and urban research“, in: *Progress in human geography* 28 (1), S. 101-107.
- Lefebvre, Henri (1986 [1974]): *La production de l'espace*, Paris: Éditions Anthropos. 斎藤日出治訳, 空間の生産, 2000. 青木書店.
- Leibenath, Markus/Otto, Antje (2012): „Diskursive Konstituierung von Kulturlandschaft am Beispiel politischer Windenergiediskurse in Deutschland“, in: *Raumforschung und Raumordnung* 70, S. 119-131.
- Lemke, Thomas (1997): *Eine Kritik der politischen Vernunft: Foucaults Analyse der modernen Gouvernementalität*, Berlin/Hamburg: Argument.
- Lévi-Strauss, Claude (1971 [1958]): *Strukturelle Anthropologie*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 荒川幾男ほか訳, 構造人類学, 1972. みすず書房.
- Lévi-Strauss, Claude (1993 [1948]): *Die elementaren Strukturen der Verwandtschaft*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 福井和美訳, 親族の基本構造, 2000. 青弓社.
- Linnemann, Kirsten/Reuber, Paul (2015): „Der lange Schatten der Moderne: Entwicklungs- und geopolitische Diskurse deutscher Hilfsorganisationen“, in: *Geographische Zeitschrift* 103 (1), S. 1-18.
- Lossau, Julia (2002): *Die Politik der Verortung. Eine postkoloniale Reise zu einer „anderen“ Geographie der Welt*, Bielefeld: transcript.
- Maeße, Jens (2016): „Diskursforschung zur Ökonomie“, in: Angermüller, Johannes et al. (Hg.), *Diskursforschung. Ein interdisziplinäres Handbuch*, Band I, Bielefeld: transcript, S. 300-316.
- Marchart, Oliver (2002): „Gesellschaft ohne Grund: Laclaus politische Theorie des Post-Fundationalismus“, in: Laclau, Ernesto (Hg.), *Emanzipation und Differenz*, Wien: Turia+Kant, S. 7-19.
- Marchart, Oliver (2017): „Die Diskursanalyse der Essex School“, in: Marchart, Oliver (Hg.), *Ordnungen des Politischen*, Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, S. 57-72.
- Massey, Doreen (1992): „Politics and space/time“, in: *New Left review* 196, S.65-84.
- Massey, Doreen (1999): „Philosophy and politics of spatiality: some considerations“, in: *Geographische Zeitschrift* 87 (1), S. 1-12.
- Massey, Doreen (2005): *For space*, Los Angeles: SAGE. 森 正人, 伊澤高志訳, 空間のために, 2014. 月曜社.
- Mattissek, Annika (2007): „Diskursanalyse in der Humangeographie. „State of the Art““, in: *Geographische Zeitschrift* 95 (1-2), S. 37-55.
- Mattissek, Annika (2008): *Die neoliberale Stadt. Diskursive Repräsentationen im Stadtmarketing deutscher Großstädte*, Bielefeld: transcript.
- Mattissek Annika (2017): „Geographie“, in: Roth, Kersten-Sven/Wengeler, Martin/Ziem, Alexander (Hg.), *Handbuch Sprache in Politik und Gesellschaft*, Berlin/Boston: de Gruyter, S. 533-552.
- Mattissek, Annika/Proseck, Achim (2013): „Regieren und Planen“, in: Freytag, Tim/Lippuner, Roland/Lossau, Julia (Hg.), *Schlüsselbegriffe der Kultur- und Sozialgeographie*, Stuttgart: UTB, S. 198-211.
- Mattissek, Annika/Reuber, Paul (2004): „Die Diskursanalyse als Methode in der Geographie – Ansätze und Potentiale“, in: *Geographische Zeitschrift* 92 (4), S. 227-242.
- Mattissek, Annika/Reuber, Paul (2016): „Demographisch-ökonomische Chance oder kulturell-identitäre Bedrohung? Printmediendiskurse um geflüchtete Personen in Deutschland“, in: Berichte. *Geographie und Landeskunde* 90 (3), S. 181-200.
- Mattissek, Annika/Sturm, Cindy (2017): „How to make them walk the talk: governing the implementation of energy and climate policies into local practices“, in: *Geographica Helvetica* 72, S. 123-135, <https://doi.org/10.5194/gh-72-123-2017>
- Mattissek, Annika/Wiertz, Thilo (2014): „Materialität und Macht im Spiegel der Assemblage-Theorie: Erkundungen am Beispiel der Waldpolitik in Thailand“, in: *Geographica Helvetica* 69 (3), S. 157-169.
- McIntyre, Lee C. (2018): *Post-truth (= The MIT Press essential knowledge series)*, Cambridge/London: MIT Press. 大橋完太郎 監訳, ポストトゥルース, 2020. 人文書院.
- Meyer, Frank/Miggelbrink, Judith/Schwarzenberg, Tom (2016): „Reflecting on the margins: socio-spatial stigmatisation among adolescents in a peripheralised region (= Comparative Population Studies)“, in: *Zeitschrift für Bevölkerungswissenschaft* 41 (3-4), S. 1-36.
- Miggelbrink, Judith (2002): „Kommunikation über Regionen. Überlegungen zum Konzept der Raumsemantik in der Humangeographie“, in: *Berichte zur deutschen Landeskunde* 76 (4), S. 273-306.
- Miggelbrink, Judith/Redepenning, Marc (2004): „Die Nation als Ganzes? Zur Funktion nationalstaatlicher Semantiken“, in: *Berichte zur deutschen Landeskunde* 78 (3), S. 313-337.
- Mouffe, Chantal (1999 [1996]): „Dekonstruktion, Pragmatismus und die Politik der Demokratie“, in: Mouffe, Chantal (Hg.), *Dekonstruktion und Pragmatismus. Demokratie, Wahrheit und Vernunft*, Wien: Passagen Verlag, S. 11-35. 青木隆嘉訳, 脱構築とプラグマティズム——来たるべき民主主義, 2002. 法政大学出版局.
- Mouffe, Chantal (2007 [2005]): *Über das Politische. Wider die kosmopolitische Illusion*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp. 篠原雅武訳, 政治的なものについて——闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築, 2008. 明石書店.
- Müller, Martin (2015): „Assemblages and Actor-networks: Rethinking Socio-material Power, Politics and Space“, in: *Geography Compass* 9 (1), S. 27-41.
- Münker, Stefan/Roesler, Alexander (2000): *Poststrukturalismus*, Stuttgart: Metzler.
- Nöth, Winfried (2000): *Handbuch der Semiotik*, Stuttgart/Weimar: Metzler.

- Nonhoff, Martin (2006): *Politischer Diskurs und Hegemonie: das Projekt „Soziale Marktwirtschaft“*, Bielefeld: transcript.
- Ó Tuathail, Gearóid (1996): *Critical Geopolitics. The Politics of writing global space*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Oßenbrügge, Jürgen (2018): „March for Sozialgeographie? Rechtspopulismus als Zumutung und die regressive Moderne als Herausforderung der Humangeographie“, in: *Geographica Helvetica* 73 (4), S. 309-319.
- Oßenbrügge, Jürgen/Sandner, Gerhard (1994): „Zum Status der Politischen Geographie in einer unübersichtlichen Welt“, in: *Geographische Rundschau* 46 (12), S. 676-684.
- Otto, Antje/Leibenath, Markus (2014): „The interrelation between collective identities and place concepts in local wind energy conflicts“, in: *Local Environment* 19, S. 660-676.
- Paterson, Matthew/Stripple, Johannes (2007): „Singing climate change into existence: on the territorialization of climate policy-making“, in: Pettenger, Mary E. (Hg.), *The social construction of climate change. Power, knowledge, norms, discourses*, Aldershot: Ashgate, S. 149-172.
- Pettenger, Mary E. (2007): „Introduction: power, knowledge and the social construction of climate change“, in: Pettenger, Mary E. (Hg.), *The social construction of climate change. Power, knowledge, norms, discourses*, Aldershot: Ashgate, S. 1-19.
- Phillips, Louise/Jørgensen, Marianne W. (2002): *Discourse analysis as theory and method*, London: SAGE.
- Pott, Andreas (2005): „Kulturgeographie beobachtet. Probleme und Potentiale der geographischen Beobachtung von Kultur“, in: *Erdkunde* 59 (2), S. 89-101.
- Redepenning, Marc (2006): *Wozu Raum? Systemtheorie, critical geopolitics und raumbezogene Semantiken*, Leipzig: Leibniz-Institut für Länderkunde.
- Reuber, Paul (2012): *Politische Geographie*, Paderborn: Schöningh.
- Reuber, Paul/Wolkersdorfer, Günter (2003): „Geopolitische Leitbilder und die Neuordnung der globalen Machtverhältnisse“, in: Gebhardt, Hans/Reuber, Paul/Wolkersdorfer, Günter (Hg.), *Kulturgeographie. Aktuelle Ansätze und Entwicklungen*, Heidelberg: Spektrum, S. 47-65.
- Rose, Nikolas (1992): „Governing the enterprising self“, in: Heelas, Paul/Morris, Paul (Hg.), *The values of the enterprise culture*, London/New York: Routledge, S. 141-164.
- Rose, Nikolas (1999): *Powers of freedom. Reframing political thought*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Roßmeier, Albert/Weber, Florian/Kühne, Olaf (2018): „Wandel und gesellschaftliche Resonanz – Diskurse um Landschaft und Partizipation beim Windkraftausbau“, in: Kühne, Olaf/Weber, Florian (Hg.), *Bausteine der Energiewende. Neue positivistische und konstruktivistische Perspektiven auf den gesellschaftlichen Kontext der Energiewende*, (= Raumfragen: Stadt – Region – Landschaft), Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften, S. 653-679.
- Said, Edward W. (1978): *Orientalism*, London: Vintage. 今沢紀子訳, オリエンタリズム, 1986. 平凡社.
- Sarasin, Philipp (2003): „Die Wirklichkeit der Fiktion. Zum Konzept der ‚imagined communities‘“, in: Sarasin, Philipp (Hg.), *Geschichtswissenschaft und Diskursanalyse*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp, S. 150-176.
- Saussure, Ferdinand de (1931 [1916]): *Grundfragen der allgemeinen Sprachwissenschaft*, Berlin: de Gruyter. 小林英夫訳, 一般言語学講義, 1972. 岩波書店.
- Schäfer, Susann/Everts, Jonathan (Hg.) (2019): *Handbuch Praktiken und Raum (= Sozial- und Kulturgeographie, Band 28)*, Bielefeld: transcript.
- Schatzki, Theodore R. (2008): *Social Practices: A Wittgensteinian Approach to Human Activity and the Social*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schätzl, Ludwig (1978): *Wirtschaftsgeographie*. Band 1: Theorie, Paderborn u.a.: Schoeningh.
- Schipper, Sebastian (2013): *Genealogie und Gegenwart der unternehmerischen Stadt: neoliberales Regieren in Frankfurt am Main, 1960-2010*. Münster: Westfälisches Dampfboot.
- Schlottmann, Antje (2005): *RaumSprache. Ost-West-Differenzen in der Berichterstattung zur deutschen Einheit*, Stuttgart/München: Franz Steiner Verlag.
- Schneider, Werner (1999): „So tot wie nötig – so lebendig wie möglich!“ *Sterben und Tod in der fortgeschrittenen Moderne. Eine Diskursanalyse der öffentlichen Diskussion um den Hirntod in Deutschland*, Münster: LIT.
- Schreiber, Verena (2005): „Regionalisierungen von Unsicherheit in der Kommunalen Kriminalprävention“, in: Glasze, Georg/Pütz, Robert/Rolfes, Manfred (Hg.), *Diskurs – Stadt – Kriminalität*, Bielefeld: transcript, S. 59-103.
- Schreiber, Verena (2011): *Fraktale Sicherheiten (= Kultur und soziale Praxis)*, Bielefeld: transcript.
- Schwab-Trapp, Michael (2001): „Diskurs als soziologisches Konzept. Bausteine für eine soziologisch orientierte Diskursanalyse“, in: Keller, Reiner et al. (Hg.), *Handbuch Sozialwissenschaftliche Diskursanalyse*. Band 1: Theorien und Methoden, Opladen: Leske + Budrich, S. 261-283.
- Searle, John R. (1969): *Speech acts. An essay in the philosophy of language*, Cambridge: University Press. 坂本百大, 土屋 俊訳, 言語行為: 言語哲学への試論, 1994. 勁草書房.
- Souza e Silva, Adriana de (2006): „From Cyber to Hybrid“, in: *Space and Culture* 9, S. 261-278.
- Spivak, Gayatri Chakravorty (1996): *The Spivak reader. Selected works of Gayatri Chakravorty Spivak*, New York: Routledge.
- Strüver, Anke (2003): „Das duale System‘: Wer bin ich - und wenn ja, wie viele? Identitätskonstruktionen aus feministisch-post-strukturalistischer Perspektive“, in: Gebhardt, Hans/Reuber, Paul/Wolkersdorfer, Günter (Hg.), *Kulturgeographie. Aktuelle Ansätze und Entwicklungen*, Heidelberg: Spektrum, S. 113-128.
- Strüver, Anke (2005a): *Macht Körper Wissen Raum? Ansätze für eine Geographie der Differenzen*, Wien: Institut für Geographie und Regionalforschung der Universität Wien.

- Strüver, Anke (2005b): *Stories of the „boring border“: The Dutch-German borderscape in people's minds*, Münster: LIT.
- Strüver, Anke (2007): „Der kleine Unterschied und seine großen Folgen – geschlechtsspezifische Perspektiven in der Geographie“, in: Gebhardt, Hans/Glaser, Rüdiger/Radtke, Ulrich/Reuber, Paul (Hg.), *Geographie: Physische Geographie und Humangeographie*, Heidelberg/München: Elsevier Spektrum, S. 904-911.
- Strüver, Anke (2011): „Der Konstruktivismus lernt laufen – ‚Doing more-than-representational geography‘“, in: *Social Geography* (6), S. 1-13.
- Strüver, Anke/Wucherpennig, Claudia (2020): „Performativität“, in: Glasze, Georg/Mattisek, Annika (Hg.), *Handbuch Diskurs und Raum. Theorien und Methoden für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung*, Bielefeld: transcript, S. 249-268.
- Sturm, Cindy (2019): *Klimapolitik in der Stadtentwicklung. Zwischen diskursiven Leitvorstellungen und politischer Handlungspraxis*, Bielefeld: transcript.
- Viehöver, Willy (2003): „Die Wissenschaft und die Wiederverzauberung des sublunaren Raumes“, in: Keller, Reiner et al. (Hg.), *Handbuch Sozialwissenschaftliche Diskursanalyse. Band 2: Forschungspraxis*, Opladen: Leske + Budrich, S. 233-270.
- Vogelmann, Frieder (2019): „Mit Unwahrheit kämpfen. Zur Aktualität von Vernunftkritik“, in: *WestEnd. Neue Zeitschrift für Sozialforschung* 16 (2), S. 25-46.
- Voppel, Götz (1999): *Wirtschaftsgeographie. Räumliche Ordnung der Weltwirtschaft unter marktwirtschaftlichen Bedingungen*, Stuttgart/Leipzig: Teubner.
- Wardenga, Ute (2002): „Alte und neue Raumkonzepte für den Geographieunterricht“, in: *Geographie heute* 23 (200), S. 8-11.
- Wardenga, Ute (2006): „Raum- und Kulturbegriffe in der Geographie“, in: Dickel, Mirka/Kanwischer, Detlef (Hg.), *TatOrte. Neue Raumkonzepte didaktisch inszeniert*, Berlin: LIT, S. 21-47.
- Werlen, Benno (1987): *Gesellschaft, Handlung und Raum: Grundlagen handlungstheoretischer Sozialgeographie*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Werlen, Benno (1995): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Band 1: Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum.*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Werlen, Benno (1997): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Band 2: Globalisierung, Region und Regionalisierung*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Whatmore, Sarah (2006): „Materialist returns: practising cultural geography in and for a more-than-human world“, in: *cultural geographies* 13 (4), S. 600-609.
- Wiertz, Thilo/Schopper, Tobias (2019): „Theoretische und methodische Perspektiven für eine Diskursforschung im digitalen Raum: Die Bundestagswahl 2017 auf Twitter“, in: *Geographische Zeitschrift* 107 (4), S. 254-281.
- Wittgenstein, Ludwig (1953): *Philosophische Untersuchungen*, Oxford: Blackwell. 鬼界彰夫訳. 哲学探究. 2020. 講談社.
- Wodak, Ruth/Meyer, Michael (Hg.) (2015): *Methods of critical discourse studies*, Los Angeles u.a.: SAGE.
- Wolkersdorfer, Günter (2001): „Politische Geographie und Geopolitik: Zwei Seiten derselben Medaille?“, in: Reuber, Paul/Wolkersdorfer, Günter (Hg.), *Politische Geographie: Handlungsorientierte Ansätze und Critical Geopolitics*, Heidelberg: Selbstverlag des Geographischen Instituts der Universität Heidelberg, S. 33-56.
- Wrana, Daniel/Ziem, Alexander/Reisigl, Martin/Nonhoff, Martin/Angermüller, Johannes (Hg.) (2014): *DiskursNetz: Wörterbuch der interdisziplinären Diskursforschung*, Berlin: Suhrkamp.
- Wucherpennig, Claudia/Strüver, Anke/Bauriedl, Sybille (2003): „Wesens- und Wissenswelten - Eine Exkursion in die Praxis der Repräsentation“, in: Hasse, Jürgen/Helbrecht, Ilse (Hg.), *Menschenbilder in der Humangeographie*, Oldenburg: bis-Verlag, S. 55-87.
- Zierhofer, Wolfgang (1998): *Umweltforschung und Öffentlichkeit. Das Waldsterben und die kommunikativen Leistungen von Wissenschaft und Massenmedien*, Opladen: Westdeutscher Verlag.
- Zierhofer, Wolfgang (2007): „Natur und Kultur als Konstruktionen“, in: Gebhardt, Hans/Glaser, Rüdiger/Radtke, Ulrich/Reuber, Paul (Hg.), *Geographie. Physische Geographie und Humangeographie*, Heidelberg/München: Elsevier Spektrum, S. 934-941.
- Zima, Peter V. (1994): *Die Dekonstruktion: Einführung und Kritik*, Tübingen: Francke.
- Žižek, Slavoj (1991): *Liebe Dein Symptom wie Dich selbst! Jacques Lacans Psychoanalyse und die Medien*, Berlin: Merve.

訳者あとがき

冒頭にもあるように、本稿はゲオルグ・グラスツェ (Georg Glasze) およびアニカ・マティセック (Annika Mattisek) 編「Handbuch Diskurs und Raum: Theorien und Methoden für die Humangeographie sowie die sozial- und kulturwissenschaftliche Raumforschung (ハンドブック 言説と空間——人文地理学及び社会科学, 文化研究における空間研究のための諸理論と諸手法)」の第1章の日本語訳である。本書は2009年にtranscript出版から第1版が出版され、内容には変更のない第2版を経た後2021年に第3版が刊行されており、本稿はこの第3版の校正段階での原稿を底本とした。

編者の一人であるゲオルグ・グラスツェはエアランゲン＝ニュルンベルク大学地理学教室の教授であり、マインツ大学在学中にはフランス留学も経験している。またもう一人のアニカ・マティセックはフライブルク大学地理学教室の教授であり、ハイデルベルク大学在学中にはカナダへと留学していた。そのためか、第5章(第1版では第6章)にはフランコフォニー国際機関を例にした言説研究もある。

文中にも一部記述があるが、本書は2004年から言説研究に関心を持つドイツ国内の若手の地理学研究者らがラウエンタールに集って行なった一連のワークショップでの活動が基になっている。このワークショップはその後DFG(ドイツ研究振興協会:ドイツの大学や研究機関で行われる基礎研究に対し

て研究助成をする政府機関)から学術ネットワーク「人文地理学における言説研究」の名目で助成を受け、第1版はその成果として発刊された。一方で、第1版第1章のドイツ語圏地理学における言説理論の受容に関する節では、ポール・ロイバー(ミュンスター大学教授、ドイツの大学で広く用いられるテキスト『政治地理学』の著者)やハンス・ゲブハルト(ハイデルベルク大学教授)との協働がみられるなど、若手のみならずドイツ語圏地理学における言説分析への広い関心もみてとれる。また、訳者がハイデルベルク大学で「概論：人文地理学における言説理論的な諸手法」と名付けられた、本書の第1版をテキストとする集中講義を受講したことも、言説研究への当地での関心の広さや議論の厚みを説明する一助となり得るだろう。

本書は、ごく大雑把には空間論的転回以降の地理学の議論の中に言説理論を接続し、言説理論的な視角や手法を用いた地理学研究のあり方を理論的・方法的に展望していくものであり、第1章は総論的に基本的な視角や理論的な基盤がまとまっている。その後の章ではまずフォーコーの言説理論が参照された後に、これを批判的に継承するラククラウとムフによる言説理論が参照され、経験的な研究はむしろラククラウとムフの言説理論を軸にしたものが多い。ラククラウとムフの言説理論は第5章(第1版では第6章)で整理され、そこでは個々人の社会的アイデンティティが「私たち」と「他者=彼ら」という言説的な線引きから構成されること、特に地理学との関連として、この線引きが多くの場合に「こちら側」と「あちら側」という空間的含意を持つことが注目される。そして実際の言説分析では、どのような言説的な線引きのプロセスと「こちら側」と「あちら側」の表象——これは最終的には空間それ自体の構成と結びつく——が存在しているのかが、コーパス言語学的方法やコーディングの手法等から探究される。

日本の地理学における言説概念をめぐる議論と、本稿での議論との比較を全ての点について行うことは紙幅の関係上でできないが、管見の限り、まず本稿は言説の作用を、空間そのものの構成まで含む広いものとして捉えていること、従って言説理論と空間の生産論との統合が企図されている点で新しい。つまり、言説的なプロセスを、容器としての空間の内部に生じるものとしてではなく、それによって初めて空間がそのようなものとして立ち現れてくる契機として、よりラディカルに捉え直している。次いで、日本語圏では言説理論と関連してフォーコーがよく参照されるが、本書はフォーコーにも触れながら経験的な研究はラククラウとムフに多く依っている。また実際の手法についても、コーパス言語学的方法(これはしばしば『テキストマイニング』『計量テキスト分析』と呼ばれるものとも近い)からコーディングの手続き、より解釈的なものも含んだ幅広い内容が理論的な内容とも結び付けられながら取り上げられていることが興味深い。

そのように新しく、意欲的な議論も含む本書だが、同時に「ハンドブック」としての読みやすさも兼ね備えており、中でも第1章は言説と地理学をめぐる議論の入門書として読まれ得るように思う。そのため、本稿がどなたかの勉強の一助となったり、あるいはメディア研究、テキスト研究から言説概念に近づいた学生等が、理解の幅を広げる際の手助けになれば幸いである。

末筆ではあるが、幾人かの方に謝意を表したい。明治大学の金城直樹先生および独立研究者の成瀬厚先生には、訳語の選定にあたって貴重な示唆をいただいた。ただし、訳語の選定の最終的な責任は訳者にある。また明治大学の荒又美陽先生には、埋もれかけていた拙訳の公開への貴重なアドバイスをいただいた。上述のエアランゲン=ニュルンベルク大学のゲオルグ・グラスツェ先生およびフライブルク大学のアニカ・マティセック先生、transcript出版は、修士卒であるだけの自分に快く翻訳と第1章の公開の許可を下さるとともに、翻訳用に校正段階の原稿をご送付いただいた。最後に、ケルン大学大学院に在学中のアルブレヒト・クナウバー氏は、訳者のドイツ語能力の不足を十二分に補ってくれる心強い味方として、また辛抱強く誠実な友人として、数多くの場面で力を貸してくれた。ここに記し、心より感謝する。